

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

On the Notions of Orientation in Halmahera

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 集而 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004599

ハルマヘラ島における民俗方位の構造

吉 田 集 而*

On the Notions of Orientation in Halmahera

Shuji YOSHIDA

This article reports on the notions of orientation among the Galela in North Halmahera as compared with peoples on Halmahera Island, the adjacent islands and Sula Island. The data was collected by the present writer in 1976. The studies on the notions of orientation among the Alfuren of West Seram by Jensen and the Kedang on Lembata Island by Barnes are reexamined in the light of the findings of this research.

It is commonly said that the opposition of 'land (or mountain) and sea' seems to be a basic notion of orientation widely observed among the Austronesian speaking peoples. This opposition is also used among the North Halmaheran peoples whose languages belong to NAN. Another basic notion of orientation is the opposition of 'up and down', which is found throughout the area from Halmahera to Bacan, Sula, Buru and probably Lembata. As to the particulars of opposition, some variation in the two basic oppositions has been recognized by some scholars. Moreover, the relative direction of 'up' usually corresponds to the south among these peoples except for the Ternate. In Ternate the Sultan's castle is located on the north side of the town, and accordingly the north may have been recognized as the updirection. However, it is questionable as to why 'up' is widely considered as being the south.

The Galela employ both the relative orientation of the 'land and sea' and 'up and down' oppositions and the absolute orientation of the cardinal points; the latter being calculated according to the position of the sun and the direction of the monsoon. The people, thus, have a double system on orientation in contrast with the Alfuren of West Seram who lack the absolute orientation system.

The terms of orientation of the peoples in Halmahera are

* 国立民族学博物館第2研究部

derived from pronouns of place and affixes of position and direction. In Galela there are 92 terms of direction and position made by combinations of pronouns and affixes. If the terms further combined with the affix of stress are added they number 151. Thus from a large number of terms which seem so complicated to us the people can select one which is appropriate for their situation.

As to the way of constructing terms of direction and position through the combination of pronouns and affixes, two basic types may be distinguished in the area covered in this study: (1) The Halmahera Type and (2) The Sula-Bacan Type. The former combines four affixes which indicate the cardinal points with pronouns, but the latter uses the one or two prepositions of position instead of affixes. The Halmahera Type can be subdivided into two: (a) the North Halmahera Type, distinguishing the four pronouns of direction with 'near' and 'far', and (b) the South Halmahera Type, which lacks such pronouns. The latter can be further subdivided into two types: (i) Makian Type and (ii) Maba Type. In the Makian Type affixes are used as prefixes and suffixes interchangeably. When an affix is used as prefix it carries a meaning different from that when the same affix is used as suffix. In the Maba Type such affixes are only used as suffixes.

The Sula-Bacan Type of constructing terms of direction can be observed among many peoples in Austronesia, whereas the Halmahera Type, which is characterized by indicating such a direction as "heading from upward to downward on the sea" in one word 'idai', has not been found in any other areas as far as the present writer knows. Therefore, the Halmahera Type may be regarded as being unique in the terms it uses for direction and position. It may be possible to speculate about Austronesian speaking peoples: that the Halmahera Type of orientation might have developed independently as a result of the peoples' lives being intimately connected with the sea, or that it may be the surviving part of a prototype which has already disappeared from the other areas. As to that matter, however, further investigation is necessary.

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1. はじめに | (3) Tobelo 族の民俗方位 |
| 2. ハルマヘラ島 | (4) Modole 族の民俗方位 |
| 3. Galela 族の民俗方位 | (5) Ternate 族の民俗方位 |
| (1) 絶対的方位 | (6) West Makian 族の民俗方位 |
| (2) 相対的方位 | (7) East Makian 族の民俗方位 |
| (i) 方位と位置 | (8) Maba 族の民俗方位 |
| (ii) 付加語 | (9) Weda 族の民俗方位 |
| (3) 方位にかかわる語彙 | (10) Patani 族の民俗方位 |
| (4) 相対的方位のあり方 | (11) Buli 族の民俗方位 |
| (5) 実際の方位の用い方 | (12) Bacan 族の民俗方位 |
| (6) 民俗方位の意味 | (13) Sanana 族の民俗方位 |
| 4. ハルマヘラ島を中心とした地方の民俗方位 | 5. 民俗方位の構造の類型と語彙 |
| (1) Loloda 族の民俗方位 | 6. 4つの方位について |
| (2) Tobaru 族の民俗方位 | 7. おわりに |

1. は じ め に

物事をさし示すために、あるいは物事の移動の方向を示すために用いられる、ある恒常的な方向を方位という。東西南北はその代表的なものであり、広く世界中で用いられている。現在、私達が用いている東西南北という方位は、道具的には磁石で定めることができ、地図的には、緯度、経度の方向をそれぞれ、南北、および東西と読んでいる。そして、それは、地球上の極点を除いたどの地点においても用いることができる方位としてとりあつかわれている。また、その方位は単に4方向にかぎらず、その中間の北東や南東などの4方位、さらに北北東や北北西などの8方位を加えて16方位として表現することができる。また、東に6度などと、より細かく正確に表現することも可能である。

このような方位は、現在ではもっとも広く用いられているものであり、それは文明の所産としての方位である。しかしながら、人類は、このような方位のみを用いているのではない。世界のいろいろな場所で、さまざまな方位が用いられていた、あるいは用いられている。東西南北というような方位を文明の所産としての方位とするならば、それとは異なるさまざまな方位は文化の所産としての方位と呼ぶことができる。この方位を民俗方位と称している。そして、いずれ民俗方位はその文化の中でよほど重要な概念でなければ、文明の所産としての方位を受け入れ、変換されてしまう運命にある。現在、世界各地でいろいろの概念あるいは言葉が東西南北という言葉に翻訳

されあるいはされつつある。そして、ある場合には適切に、ある場合には不適切に翻訳化が進んでいるのである。

民俗方位は、先に述べたごとく文化的所産である。民俗方位の概念そのものが文化的事象なのである。それゆえに、民俗方位をあつかうことは、一つの文化的事象をあつかうことと同じことである。

民俗方位の研究には、二つの側面がある。emic な研究、etic な研究と表現してもよい。一つの側面は、民俗方位を用いて当該の社会、あるいは文化を分析し理解することである。民俗方位は一般に価値観をとまなっており、それが、当該社会の人々の思考や行動を律するのにどのような規則性があるかを明らかにすることである。このような研究は一般に「方位観」の研究と呼ばれる。

バリ島においては、海の方角を *kelod*、山の方角を *kaja*¹⁾ と呼ぶ海と山の対比による相対的な方位がみられる。そして *kaja* は良き方向、*kelod* は悪しき方向としての価値観をもつ。そして天界と下界、男と女、満月と新月、昼と夜、生と死、*black magic* と *white magic* などの一対の概念は、方位としての *kaja* と *kelod* に結びついている [SWELLINGREBEL 1960: 37-40; 倉田 1964: 2-3, 1965: 2-4; COVARRUBIAS 1938: 260]。バリ島では *kaja*、*kelod* の他に *kangin* (右の方角、バリ島南部では東にあたる) と *kauh* (左の方角、西) の 2 方位があり、これらにも優劣がついている。バリの民話の中から、天国と地獄のありかをさがすと、天国は山あるいは東の方角にあり、地獄は海あるいは西の方角にある [HOOPYKAAS 1956: 85-86]。また、4 つの民俗方位が家屋敷の位置、寺院の配置などともかかわっている [倉田 1972: 134-137] し、儀礼の分析から、これらの 4 方位に中心 (*pusém*) を加えた 5 つの要素が、曜日 (バリの暦では週 5 日)、色、数、悪魔、神、動物、金属などと結びついた世界観を構成しているとされている [BELO 1953: 22-27; 吉田 1975a: 32-36, 1956: 138-146]。そして、このような方位観は、日常生活 (たとえば客をどの方向にすわらせるかとか、寝るときの頭をどの方向に向けるかとか、さかなを食べないとか、海で泳がないなど) 社会組織、民族性、芸術などバリの人々のすべての面にわたってかかわっているという [COVARRUBIAS 1938: 260]。この著しい例として、遠くの村に踊りをならわすために子供をおくったところ、方位を見失い、踊りをならうどころか寝食もできず、ほとんど病気にかかったような状態になった例がある。そして、*Agung* 山のみえるところまでこの子供をつれていったとき、その子供は「北だ」と突然にさげび、もとの

1) 本論での各言語の記載は現在用いられているインドネシア語を基本としている。そのため、*dj* は *j* に、*j* は *y* に、*ij* は *c* に書き改めている。また、オランダ語表記の *oe* を *u* に書き改めている。

表1 中心と4方位とに結びつく要素（バリ）

方位	悪魔	曜日 (週5日)	神	色	数	金属	動物
kangin (右, 東)	Sang Batu keruna	manis	Isuwara	白	5	銀	がちょう
kelod (海, 南)	Sang Batu kala Janggitan	paing	Brahma	赤	9	銅	赤犬
kauh (左, 西)	Sang Batu kala pasah	pou	Mahadewa	黄	7	金	黄色子牛
kaja (山, 北)	Sang Batu Langkir	wage'	Wisnu	黒	4	鉄	黒いやぎ
pusém (中心)	Sang Batu Tigasakti	klion	Siwa	多色 (混色)	8	合金	多色のニワトリ

[Belo, 1953: 27] の表から、方位を民俗方位にかえ、金属、動物を加えた。また数字は基数のみにした。方位の（ ）内の東西南北は、バリ島南部におけるものである。

元気な状態にもどったという [Belo 1935: 127]。

バリにみられたような4方位と中心の5つからなる要素は、ジャワにおいても、色や金属、曜日、職業などのさまざまな要素と結びつけて考えられている [Van der Kroef 1954: 854]。

また、小スンダ列島中の Lembata 島の Kedang 族においても、4つの相対的方位が認められ、この民俗方位が彼らの社会を理解する上で重要な概念であることが知られている [Barnes 1974]。さらに、フィリピンのボットック族の方位観の研究も、民俗方位を用いた神話の分析であり [合田 1976]、馬淵の沖縄を中心とした神話の解析もある側面からみれば、民俗方位の研究とみることもできる [馬淵 1974]。

さて、このような一連の方位観に関する研究は、世界観の研究と密接に関係しており、それ故に、非常に重要なものであるが、同時に、それ故にやや常套的な研究ともいえるであろう。しかし、民俗方位の研究はこれらにとどまるものではない。たとえば、方位観や世界観をとりあつかうにしても、その基礎となる民俗方位のあり方をしっかりと把握しておくことは重要なことである。いろいろの文化の広がりの中で、どのような民俗方位があるのか、それはまたどのようにして形成されたものなのか、あるいは人類にとって方位とはなんであるのかなどを研究する分野がある。民俗方位に関する通文化的な研究である。

Kern は、倉田によれば「海の側と内陸または高地側の相対的な方位感覚を示す言語習慣はマライ・ポリネシア族がまだ一つの民族から成立っていた古い時代にその起源を求めねばならないほど、彼らのあいだに深く根をおろしている」としている [倉田 1972: 123]。この指摘は、民俗方位の研究の一つの方向を示しているように考えられる。倉田のインドネシアにおけるバリを中心とした8つの言語での方位の検討 [倉田

1972: 128-131]や、合田のタガログ語、イロカノ語、カリング語、ボットック・イゴロット語など多くのフィリピン諸言語における方位名称の検討[合田 1976: 82-90]も、オーストロネシア語族内における方位の比較研究といえるであろう。移川の高砂族における熟蕃を含めた10の言語における方位名称の比較[移川 1940]もこの分野の研究に含まれる。そして、これらの諸論文を通して、オーストロネシア語族の中にあつては、海側と陸側による方位が比較的広く分布していることがはっきりしてきたとともに、これらの民俗方位は太陽、風、地形[倉田 1968: 3-7]、借用などによって形成されていることも明確になってきた。

さて、本論は、このような分野に分けたとき、その比重は後者に重くかかっている。ハルマヘラにおける伝統的社会の変貌は激しく、価値観を問うには適当な社会ではないことが一つの理由であるが、一方では、ハルマヘラにおいてみられる民俗方位は、これまでに報告された民俗方位に比べると非常に複雑な構造をもっている。ただし、ハルマヘラの民俗方位は、それらと異なったレベル——日常生活のレベル——において重要な機能をもっていることを書き加えておかなければならない。通文化的な側面に重きをおくにしても、本論では、直接に資料を収集した北マルク州にその範囲を限っている。さらに広い範囲に渡っての比較は、異なった方法論において別に展開してみたいと考えている。

この報告は、昭和51年度文部省科学研究費補助金（海外学術調査）の「ハルマヘラ島における農耕文化と言語の諸類型の調査」の調査報告の一部を構成しているものである。1976年9月18日から12月10日まで、テルナーテおよび北部ハルマヘラのガレラ地方において行った調査資料にもとづくものである。

2. ハルマヘラ島

本論は、通文化的な立場から民俗方位をとりあげようとしているが、方法論的にはEthnoscience 的である。Sturtevantによれば、Ethnoscience の science としての要素は本質的には分類(classification)にある[STURTEVANT 1964: 99]。そして分類の手がかりは、基本的には言葉である。Hall の proxemics や Birdwhistell の kinesics のような言葉を用いないコミュニケーションのシステムの解析もあるが、むしろこれらはユニークな研究といえるであろう。

本論においても、言葉によって民俗方位の分析をすすめることになる。そして、分類する方法は、基本的には成分分析法である。

そのため、ハルマヘラについて説明するとき、ハルマヘラの言語についてはやや詳しく触れておく必要がある。

ハルマヘラにおける言語（方言）の種類は18以上にのぼり、複雑な様相を呈しているが、大きくは系統の異なった2つの語族に分けられる。北部ハルマヘラの言語は Non-Austronesian 語族〔略して NAN という〕に属す言語で、Cowan によれば西イリアンのパプア系の言語と関連がある言語である [COWAN 1957: 86-91, 1959: 159-161]。北部ハルマヘラ語族に含まれる言語は、Galela, Tobelo, Modole, Pagu (Isam), Loloda (Loda), Ibu, Tobaru, Wayoli (Waioli), Ternate, Tidore などである [HUETING 1908b: 370-411]。そして、最近の Watuseke の研究によれば、West Makian も NAN に属すという [WATUSEKE 1976]。

南部ハルマヘラの言語は、Austronesian 語族〔略して AN〕に属し、Buli, Maba, Patani, Sawai, Weda, Gane (Gani), East Makian, Kayoa などからなる。南部ハルマヘラの言語については、北部ハルマヘラの言語ほど明確にとらえられておらず、従来西ニューギニア語群の一部をなすインドネシア語派東インドネシア語群に属す言語と考えられていた [SALZNER 1960: 19]。しかし、崎山の Buli 語の研究によれば、Buli 語は重層化しており、表層はインドネシア系であり、基礎はむしろポリネシア系であるという [崎山 1973: 201-222]。そして、「1つの仮設が許されるならば」と断りながら、次のようにいう。「いわゆるオセアニア語はその分布の過程において、ハルマヘラ島を通過したのではなからうか。現在のハルマヘラ島北部に見られるパプア語は、既にそれ以前からこの地に定住していた民族の名残りであろう。」 [崎山 1973: 221-222]。そして、Buli 語が、ポリネシア系の言語を基礎語としてもっているのならば、あるいは他の南部ハルマヘラの言語も同様である可能性はきわめて高いと考えられる。

なお、ハルマヘラ島の西南にあるバチャン島の Bacan 語は、AN に属するが、南部ハルマヘラの言語とは異なったグループであり、Salzner によれば、インドネシア語派の東インドネシア語群スラ・バチャン亜語群に属することになっている [SALZNER 1960: 19]。

ハルマヘラ島における民族学的な研究は言語を中心としているといっていよい。北ハルマヘラの言語の内、Galela 語については、辞書 [BAARDA 1895] も文法書 [BAARDA 1908] もある。これらの著者である Baarda は Galela 地方の Duma 村で宣教師として活動していたのであるが、一時期、Loloda にいたこともある。そして、Loloda 語についてもふれている [BAARDA 1904]。Tobelo 語については、Hueting が、辞

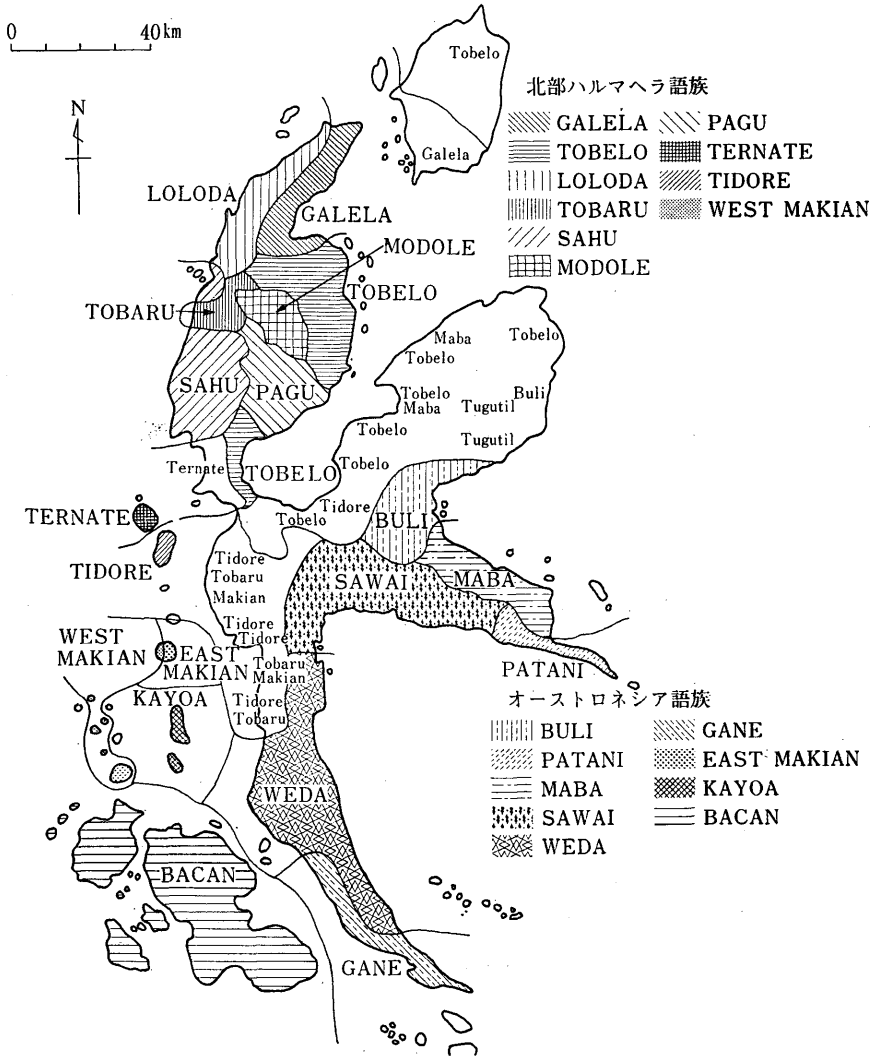


図1 ハルマヘラ島およびその周辺の言語地図

白い部分は、もともとは人が住んでおらず、後に移住してきたと考えられる地方である。

この図は Eddi Masinambo の図をもとにしたものであるが、West Makian East Makian に分離したこと、Morotai 島を移住地にしたことなどは、著者による修正である。

書 [HUETING 1908a] も文法書 [HUETING 1936] も著述している。そして、それだけではなく、Tobelo 族の民族誌をも残している [HUETING 1921, 1922]。Fortgens は Tobaru 族についての著述が多く、文法書 [FORTGENS 1928] も書いている。Pagu 語、Modole 語については、Ellen の簡単な語集のリストがあるにすぎない

[ELLEN 1916a, 1916b]。南部ハルマヘラの言語では断片的資料を除くと Buli 語の比較的好くまとまった語彙のリスト [MAAN 1940] と、私はみていないが Maan による文法書²⁾があるにとどまる。そして、ここでとりあげようとする民俗方位は、これらの辞書および文法書の中に散見されるにすぎない。

さてハルマヘラ島は北緯 2 度 30 分から南緯 1 度に位置し、ほぼ赤道直下にあるといっている。面積は約 20,000 km² で四国とほぼ同等であるが、人口はきわめて少なく、テルナーテやティドレ、バチャン島などの人口の多い島々を含めて約 38 万人 (1973) である [LEIRISSA 1977: 236]。Ternate 語や Tidore 語を除くと、先に述べた方言を話している人口はそれぞれ 2～3 万人程度でしかなく、さらに Tobaru 語や Ibu 語などは数千人位と推定される。

Gamkonora 山や Mamuya 山などの高山地帯を除いて全島、熱帯雨林地帯であり、海岸部には、マングローブ林の発達しているところもある。また Kau 川流域は広大な湿地で、サゴ林を形成している。人間はほとんど海岸部に住み、そのため、海岸線にはココヤシが多くみられる。

ハルマヘラでは 12 月～5 月にかけては雨をともなった北の季節風が吹く。しかし、風向や雨量は年によってかなりのばらつきがある。4 月あるいは 5 月と、11 月あるいは 12 月が、季節の変わり目であり、8 月、9 月は比較的規則正しく南風が吹き、雨量ももっとも少なく、そして、12 月から 6 月までは雨が多いことは一般にいえるのである [BARETTA 1917: 11]。

現在では、ココヤシの栽培が広くゆきわたりコプラの生産が重要な生業となっている。また、焼畑による陸稲、サツマイモ、マニオック、バナナなどの栽培が重要であり、村によっては魚業が主たる生業である村もある。

行政的には、ハルマヘラは二つに分割されている。Kabupaten Makulu Utara Tingkat I は、Tidore を Ibu Kacamatan (郡庁) とし、中部ハルマヘラを行政地区としている。今 1 つは Ternate を Ibu Kacamatan (郡庁) とした Kabupaten Maluku Utara Tingkat II があり、北部ハルマヘラ及び、バチャン、スラ島などを含めた南部ハルマヘラを行政地区としている。

著者らが住み込んだ村は、Kabupaten Maluku Utara Tingkat II 内にある北部ハルマヘラの Kacamatan Galela に属する Limau 村である。Kacamatan Galela は、Galela 族の住む地区であり、人口 14,083 人、Limau 村は 262 人の村である。Galela 族の中心地は、海岸部にある Soa-sio (Ibu Kacamatan の所在地、別名 Galela) で

2) Maan, G., 1951, *Proeve van een Bulische spraakkunst*, Den Haag.

あり、Soa-sio から西方にある Galela 湖周辺部がもっとも人口の稠密な地区である。そして、Soa-sio の海岸線沿いに北東にのびる半島の東岸に Galela 族の村が点在し、Galela 族の村としてはむしろ新しい村々が連なる。Limau 村はこうした村々の中ではもっとも古くから開かれた村であり、Soa-sio にもっとも近い村（Soa-sio から船外機つきの船で約 1 時間）である。

Galela 地区では、Limau 村はもっとも多くのサゴ林を所有しており、後背地において焼畑耕作を行い、沿岸部において小規模な漁業を行っている。著者らは、1976 年 9 月 23 日から 12 月 10 日までこの村に滞在し調査にあたった。また、テルナーテにおいて、ハルマヘラ各地の出身者を対象にして調査を行った。いずれの場合も、主としてインドネシア語によって調査を行っている。本論は、その際に得た資料にもとづくものである。

3. Galela 族の民俗方位

(1) 絶体的方位

方位には、絶対的方位と相対的方位の 2 つがあると考えられる。東西南北というのは絶対的方位である。

Galela 族では東西は明瞭に認められている。東は *o wange ma siwa*, あるいは *nyonyiye*³⁾ 西は *o wange ma dumu* あるいは *sosoru* という。*o wange* は「太陽」、*siwa* は「のぼり」、*dumu*, *sosoru* はともに「沈み」の意であり、東は「太陽ののぼり」、西は「太陽の沈み」の意である。Galela 地方は北緯 2 度位に位置し、ほとんど太陽ののぼる位置は移動しないとみてよい。この点は緯度の高い地域とは異なる点であろう。ただし、彼等は太陽の登る位置がわずかではあるが移動することを明確に認識している。

南北は、東西ほど明瞭に認識されていない。南北は、季節風の名称を用いる。12 月から 4 月に北から吹く季節風を *o paro o kore mie*, 6 月から 10 月に南から吹く季節風を *o paro o kore sara* という。*o paro* は Galela 語で「風」という意味であるが、*o kore mie*, *o kore sara* はともに Ternate 語からの借用語である。Ternate 語で *kore* は「風」

3) Galela 語の表記法も原則としてインドネシア語の表記法に従っている。そのため、Baarda の *j* は *y* に、*dj* は *j* に変えている。しかし、[d] あるいは [d] 音は、Baarda に従って *d* とし、私達にとって普通の音である [d] 音は *d* と表記している。

“*o wange*” の “*o*” は冠詞、*ma siwa* の *ma* は英語の *its* に相当し、ここでは日本語の「の」に相当する。

を意味する。*kore mie* は、北から吹く風として、普通「北風」と、また *kore sara* は同様に「南風」と訳されている。しかし、Ternate の人々によれば、*kore mie* は南へ吹く風であり、*kore sara* は北へ吹く風の意味であるという [BAARDA 1895: 27-28]。そのため、*mie* は「南」、*sara* は「北」という意味であると考えられる。Galela 語では、*o kore mie*, *o kore sara* を方位として受けとり、これに Galela 語の風を意味する *o paro* をつけて、それらの季節風の名称としたと考えられる。すなわち、元来は Galela 語には南北をさすことばはなかったと考えられる。

o paro o kore mie が、北から吹く季節風をさすことは明確であるが、*o kore mie* は Ternate の人々と同様に *kore mie* から吹く風か、*kore mie* へ吹く風なのであろうか。この場合、西風、東風をどのように表現するかを考察すればよい。すなわち、東風（東から吹く風）は、*o paro o wange ma nyonyije*, 西風は *o paro o wange ma sosoru* という。この例から、Galela 語では、Ternate 語のように「～へ吹く」ではなく「～から吹く」風であることがわかる。そうであるならば、Galela 族の人々によっては、*o kore mie* は北を *o kore sara* は南をさすことになる。

以上のごとく、Galela 語の絶対的方位は、東西が太陽によって、南北は季節風によって形成されているが、東西の方位と南北の方位の、方位としての定着度は同じではない。南北は先にみたように、Ternate 語からの借用語であり、東西の方位に比して、南北の方位を用いることはきわめてまれなことである。外観的には四方位が存在するとしても、その意味するところは決して同じではないのである。

(2) 相 対 的 方 位

(i) 方位と位置

Galela 族では、先に述べた絶対的方位よりは、これから述べようとしている相対的方位を用いる方が一般的でありかつ重要である。

Galela 族においても、相対的方位は、広く AN に認められる「海側の方位」と「陸側の方位」を基本としている。そして、海に向かって右側を「上」、左側を「下」とする4方位からなる。単にこれだけのことであれば、これまでに報告された方位とさして変らない。しかしながら、この4つの方位を基本として、複雑な方位概念を形成している。

Galela 族の人々が用いる方位にかかわる2, 3の例を示してみよう(図2)。今、ある人が海岸(ガレラ地方では、海は東に陸は西の方向にある)にいて、海の方を向いているとする。はるかかなたの海に1人の男が船にのって上方(海に向かって右手

の方)に進んでいるとすると、その人は *idai* にゆく (*una wo togi idai*) という。もし、日本語でいえば、「はるかかなたの海の方で、上方に向かっている」といわなければならない。Galela 語では、それを一語で表現できる。すなわち *idai* という。同様に、はるかかなたの上方に船にのった人がおり、その人が陸に向かっているとすると、その人は *sadaku* にゆくという。また、すぐ近くの海で、陸の方に向かっているならば、*sadade* という。もし、陸の

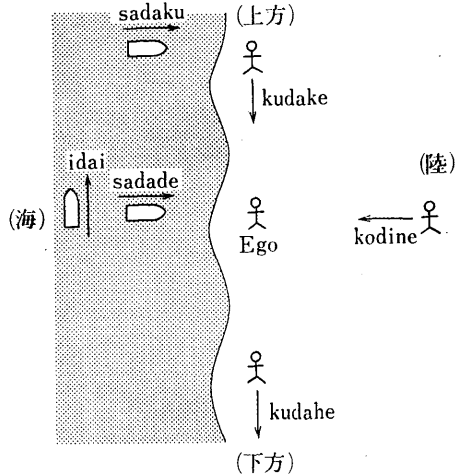


図2 Galela の民俗方位の例

方から、彼の方に向かってやってくるときは、*kordine*、上方から彼の方に向かってやってくるときは *kudake*、下方でさらに下方に向かっているときは、*kudahe* という。

ここにあげたわずかの例からも、複雑な方位の表現があることが了解されるであろう。このような表現が実は100種類近くもあるのである。

さて、「*idai*」というような表現は私達の日本語にはない。しかし、その意味するところは理解できる。そして、表現することも長くはなるが可能である。私達のように数語を用いて表現することと、Galela 語のように1語で表現することとは同じことなのであろうか。やはりどこかが違っている。Galela 語は、方位に関する語彙については日本語に比して記号度 (codability) が高いという。記号度という概念は Brown が提出したものであるが [Brown 1954], 語彙の分化密度や頻用度と相関関係をもっている。その語彙群の分化密度が高く、かつ記号度が高いとき、その語彙群の頻用度は高い。そのことは、その文化において、それらの語彙群にかかわる部分に関しての関心が高いことを普通は示している。それゆえ、Galela 族にとって方位はきわめて関心の高い部分であると考えられる。

ところで、このような方位を分析するにあたり、いろいろの表現の中から、共通する項をみつけだし、それらを集めることは一種の因数分解を行うことと同様の手続きである。そこで、たとえば、*ku-* という項をとりあげ、*ku-* をもつ語を集めてみると、次のようである。

kudaku: はるかかなたの上方からこちらに向かう

kudake: 近い上方からこちらに向かう

kudai: はるかかなたの海の方で、下方に向かう

kudade: 近い海の方で、下方に向かう

kudahu: はるかかなたの下方で、さらに下方に向かう

kudahe: 近い下方の位置から、さらに下方に向かう

kudina: はるかかなたの陸の方で、下方に向かう

kudine: 近い陸の方の位置から下方に向かう

kugena: すぐ近くから下方へ向かう

kunena: 上方からここへ、あるいはここから下方へ

これらを見ると、*ku-* はすべて、「上方から下方へ」という意味をもっていることがわかる。同様に、*i-* は「下方から上方へ」、*ko-* は、「陸側から海側へ」、*sa-* は「海側から陸側へ」の意味を与える付加語⁴⁾であることがわかる。また同様に分析することによって、語幹の方も図3に示したように、方位と位置を組みあわせた場所を示す代名詞であることが明らかになる。

すなわち、これらの場所の代名詞は、自己を中心として、方向性をもたない手とどくほど近い場所を示す *nenā*, その外側に同じく方向性をもたないすぐ近くの場所を示す *gena* がある。そして、それよりも遠方では、4方向に分けられ、それぞれ遠近で分けられる8つの代名詞がある。さきほどの *ku-* をつけたものを図示すると図4のようである。

方位をもつ遠近の4対の組合せについて、上・下は、語尾の母音の *u-e* の対立、海・陸では *a-e* の対立であるが、*dai* は例外である。

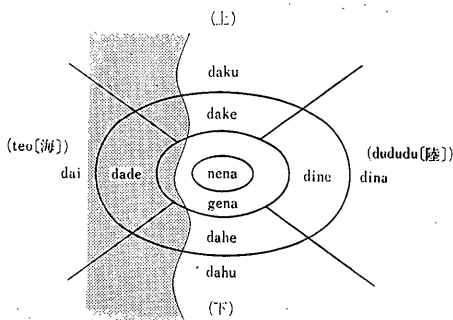


図3 Galela における空間の分割

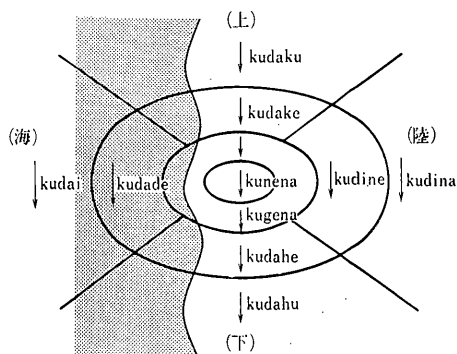


図4 *ku-* と場所の代名詞との組合せ

4) この場合であれば接頭辞としてもよいが、後の例にみるように、接頭辞としても接尾辞としても機能することがあり、それゆえにここでは、接頭辞・接尾辞をまとめて付加語と表現することにした。

さて、今海から人がこちらに向けてやってくる時、遠くから近くの順にその表現をならべると *sadai*, *sadade*, *sagena*, *sanena* という順になる。方位をもつ場所の代名詞は遠近によって区別されると述べた。しかし、その基準をより正確に表現すれば、「対象物がみえるかどうか、あるいは、対象物がはっきりと識別できるかどうか」が区別点である。たとえば単に舟影がみえる場合は *dai*（遠い海側）であるが、その舟が誰の舟かあるいは誰がのっているのかがはっきりとわかるほどに近づいたとき、*dade*（近い海側）となる。

一方、方位をもたない代名詞である *gena* と *nena* の区別点は、手がとどくほど近いかどうかにある。手がとどくほどに近いときは、*nena*、手はとどかないが、声をかければとどくほどの範囲を *gena* という。ところが、*gena* と、方位をもつ近い方の代名詞 (*dine*, *dade*, *dake*, *dahe*) との区別点は、それほど明確ではない。*gena* は、声をかければとどくほどの範囲を外枠としていたが、この境目は実際の場面でははっきりしない。また明らかにその内側であるにもかかわらず、*dine* や *dake* が用いられる例もあった。*gena* と *dine* を使いわけるのは、実は遠近ではなく方位性が強く意識されるかどうかにかかっている。そのため、遠近での境界を明確にすることはできないのである。ただし、先の例のごとく、*dake* などは *gena* よりかはるかに遠くにまでおよんでいるところから、はっきりと遠近はついている。そこで、便宜的に、*gena* の外側に *dake* などがあると表現しておくことにする。

以上の外に、方向を示す付加語がつく代名詞に、*doka*, *doke* がある。*doka*, *doke* は自己とその対象物の間に障害物のある場合の場所を示す代名詞である。障害物は、陸においては川や山、あるいは海など、まっすぐ越えるには困難なものをいう。海では、岬や島がそれにあたる。簡単にいえば「向こう側」という意味である。海・陸の語尾の母音の *a-e* 対立と同時に、向こう側においても *a-e* の対立による一組の語であり、海・陸と同様に遠近を示している。すなわち、*doka* はみえない向こう側、*doke* は見える向こう側である。

naga はきわめて特殊な代名詞⁵⁾であり、「すでに手紙や先にきた人などによってくることがわかっており、現在はまだみえていないが、やってきつつある」状態のときに用いられる。たとえば、祭などがあり、ある人が海の方からまだみえないがやってきつつあるはずであるとき、*sanaga* という。そして、もしみえたときは、*sadade* というように変る。

5) *naga* は、Baarda によれば、場所の不定の代名詞としている [BAARDA 1895: 272]。たとえば、*inaga* は「ここから上方のどこかへ」の意であり、著者の場合と意味するところが異なっている。

表2 Galela 語の場所の代名詞の分類

	遠い						声をかけられるほどに近い	
	特定の方位をもつ				方位をもたない		手がとどかない	手がとどくほど近い
	下側	上側	海側	陸側	向こう側	やってきつつある		
みえる (近)	dahe	dake	dade	dine	doke	—	gena	nena
みえない (遠)	dahu	daku	dai	dina	doka	naga		

これらの代名詞をまとめると表2のようになる。

(ii) 付加語

すでに付加語についてふれたが、ここでは付加語について、まとめてみよう。

先ほどの例では *ku-* をとりあげた。*ku-* は上方から下方への方角を示す付加語であった。これに対応する下方から上方へは *i-(iye)* であり、海から陸への方角は *sa-*、陸から海への方角は *ko-* であった。

これらの方角を示す付加語は、自己を中心としたものではなく、これらの付加語には、自己に向かうあるいははなれてゆくといった意味を全く含んでいないことは注目する必要がある。たとえば、ある物が自己に上方から下方にかけて移動してゆくとき(図4参照)、*kudaku*, *kudake*, *kugena*, *kunena* と順に近づいてくるが、自己を通りすぎてさらに下方に向かうとき、*kunena*, *kugena*, *kudahe*, *kudahu*, と変化してゆく。方向に関しては、海と陸の対比によって決定された客観的なものである。それ故に、海側の

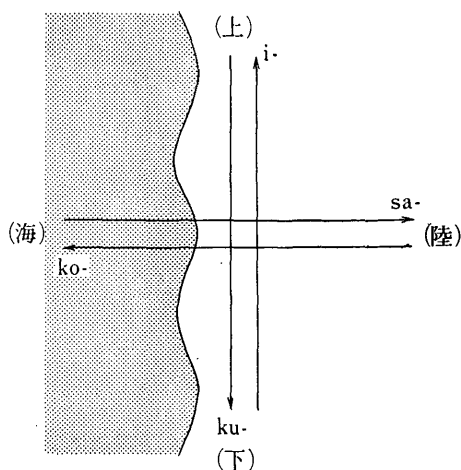


図5 4方位の付加語 (Galela)

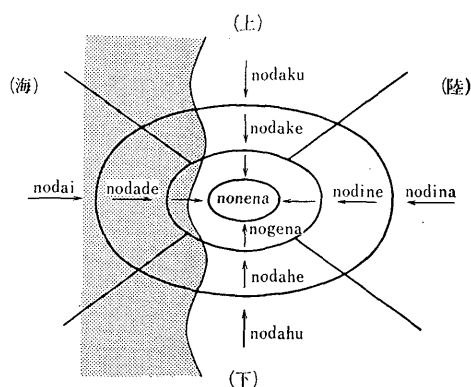


図6 付加語 no との組合せの例

場所の代名詞である *dai* や *dade* に *ku-* という上方から下方へ向かう付加語を組み合わせてことができ、海の方で上方から下方に向かうということが一言で表現できるのである。

このような客観的な方向を示す付加語のみではなく、自己を中心とした *no-*, *ka-* という付加語がある。*no-* は自己に向かう付加語, *ka-* は自己からはなれてゆく付加語である。*no-* の場合を図6に示した。*ka-* はまったく逆の図になる。*no-* は「から」と訳すことができるし, *ka-* は「へ」と訳すことができる。ただし, *nonena* は「ここへ」*kanena* は「ここから」と訳されねばならない。*no-* は「どこからかここへ」の意味を含んでいるからである。同様に *ka-* は「ここから」の意味を含んでいる。

この *no-*, *ka-* は、先にみた4方向の付加語のシステムとは全く別のシステムである。*Galela* 語では、異なった2つのシステムを併用しているといえるであろう。

ka- は、実は先に述べた意味にとどまらない。*ka-* は場所を示す付加語としても機能する。上方にあるというとき, *kadaku* のごとく用いる。

さらに, *ka-*, *no-* はもう一つ別の意味をもっている。場所の代名詞 *doka*, *doke* に対応する意味で、障害物をこえてゆくあるいはこえてくる意味で用いられる。このことを陸地で越えがたい河がある例で説明してみよう(図7参照)。川向こう側であるため、その向こう側はみえる。だから *doke* を用いる。もし、川を突っきって渡ってきたとき、それは *nodoke* という。そして、もし海側をまわってきたときは *nodade*, 山側をまわってこえてきたときは *nodine* という。図の例では、上方にいることになる。そこでもし、上方から下方へ意味をもつ付加語 *ku-* を用いたときはどうなるであろうか。*ku-* では川を越えたことを意味しない。単に上方から下方に向かうにとどまる。そのため、川のふちに下りたいという意味でしかない。

ka- の場合は、このまったく逆のことになる。*kadoke* といえば、川をこえて向こう側にゆくことを意味しているし, *kadade* は海側をまわってゆくことを示している。

自己を中心とした *ka-* や *no-* の付加語のはじめに述べた意味のシステムは、先の4方位の付加語のシステムによってほとんど同様の表現をすることができる。たとえば, *kudaku* $\equiv$ *nodaku*,

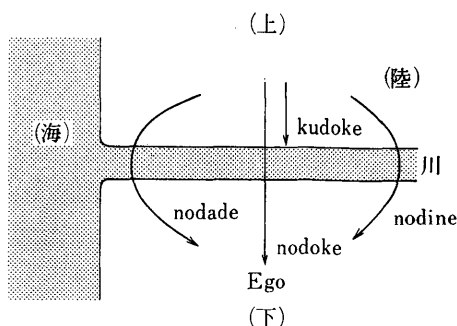


図7 障害物があるときの例

kudake ≡ *nodake*, *kudahe* ≡ *kadahe*, *kudahu* ≡ *kadahu* のごとくである。*ka-* や *no-* は単にはじめの意味だけしかもたないのならば、このシステムは必要ないといえる（ただし、自己の方へ、あるいは自己からはなれてゆくという意味をもっているため、ニュアンスとして少し異なるが、結果的にはほとんど同じことを意味している）。しかし、このような重なりが、障害物を越えてくるあるいは越えてゆくという意味を *no-* や *ka-* に持たすことが可能になる（障害物を越えてくるあるいはゆくという表現は、*no-* や *ka-* の意味をより強めたものである）。また、*ka-* は場所を示す付加語としても機能する。*Baarda* によれば *no-* も *ka-* 同様に場所を示すという [*BAARDA* 1908: 153] が、私の知る範囲では *ka-* のみしか場所を示す付加語はない。

方位をもつ場所の代名詞につく付加語はこれだけにとどまらない。*ma-* あるいは *ge-* は、それらの代名詞について指示代名詞をつくる。*madade* は、「海の方角にあるあれ」という意味であるし、*madoke* は「向かう側にあるあれ」を意味している。*magen* はインドネシア語でいう *itu* に対応し、「それ」であり、*manena* は *ini* 「これ」である。指示代名詞をつくる *ma-* あるいは *ge-* は、すべての場所の代名詞と組み合わせられるわけではない。*dai* や *dina*, *daku*, *dahu*, *doka* などのみえないほど遠くの場合は、指示することができず、これらとは組み合わせられない。

mage- はその強調である。*magedine* は「陸の側にあるまさしくあれ」を意味している。このような強調は4つの方向の付加語にもみられる。それらの付加語に *ka-* を付加した場合である。*kai-*, *kaku-*, *kasa-*, *kako-* がそれらである。*kakudake* は「まさしく上方から下方へ」の意味になる。

ma- に *ko-* を付加した *koma-* は「～と同じように」あるいは「～と同じ」の意味をもつ付加語である。*komadahe* は、「下方にあるあれと同じ」あるいは、「下方のあれ

表3 Galela 語の付加語の分類

	方 向						場 所	指 示	
	客 観 的 方 向				自己中心の方向			単に指示する	同じと指示する
	下→上	上→下	海→陸	陸→海	求心的 (向こう側 からくる)	遠心的 (向こう側 へゆく)			
普 通	i-	ku-	sa-	ko-	no-	ka-	ka- (no-)	ma- (ge-)	koma-
強 調	kai-	kaku-	kasa-	kako-				mage-	

Baarda によれば *ngo* を付加した形のものがあり、意味は同じとしている。すなわち *ngoi-*, *ngoku-*, *ngosa-*, *ngoko-*, *ngono-*, *ngoka-*, *ngoge-* などがあるとしている [*BAARDA* 1895]。これらは語頭に付加される点が特徴である。

と同じように」という意味である。*komagena* はインドネシア語の *begitu* (そのように), *komanena* は *begini* (このように) と同じ意味をもつものである。

ここに述べた付加語をまとめると表 3 のようである。Baarda によれば, それぞれの付加語 (*ma-*, *kama-* を除いて) に *ngo-* を付加した形があるとしている。意味的には変わらないが, 語頭に付加する点は, 先に述べたものと同様である。すなわち, *ngoi-*, *ngoku-*, *ngosa-*, *ngoko-*, *ngono-*, *ngoka-*, *ngoge-* の形があるとしている [BAARDA 1895]。

(3) 方位にかかわる語彙

すでに述べた場所の代名詞と付加語を組み合わせると, 表 4 のようになる。形だけをとりてみると, 強調を除いて 92 種の組合せがあることになる。もし強調をも含めれば実に 151 種の組合せがある。これに *ka-*, *no-* の意味的多義性を加えて考えるならば, きわめて多数の組合せの語があるといえる。

Galela 族の人々は, 方位や場所に関することを言おうとするとき, 具体的名詞を使わないとすれば, これらの組合せの中から, まさに適当なものを選ばなければならない。このことは, 彼らが, 常に相対的な方位をはっきりと認識していなければならないことを示している。

ところが, このことは場所の代名詞と付加語を組み合わせた語にとどまらない。動詞のレベルにおいても, 同じように方位と結びついた語が認められる。

hiye: 下方から上方にゆく, のぼる

huku: 上方から下方にゆく, くだる, おりる

hisa: 海側から陸側にゆく

hoko: 陸側から海側にゆく

hino: くる, 向こう側から越えてくる

表 4 Galela 語の場所の代名詞と付加語の組合せ

	dake	daku	dahe	dahu	dine	dina	dade	dai	doke	doka	naga	nena	gena
i (kai)-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ku (kaku)-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
sa (kasa)-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ko (kako)-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
no-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ka-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
ma, ge-, (mage)-	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-	-	+	+
koma-	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-	-	+	+

hika: ゆく, 向こう側へ越えてゆく

また、これらの動詞の変形ではあるが、*ngisa*, *nguku*, *ngoko* など⁶⁾は、腹立ちながら「～の方にいってしまえ!」というときに用いられるし、東の方位をいう *o wange ma nyonyiye* の *nyonyiye* は、「登り」を意味し、これも *hiye* を語源とするものである。夜になると陸から吹く風があり、これを *o lohoko* という。この *hoko* も、陸側から海側にゆく *hoko* を語源としたものである。さらに *bola* (帰る) にも、*ye* や、*sa*, *ku*, *ko*, *no* などが後につき、それぞれ帰ってきた方向を示すなど、このような例をさがすならばまだまだいろいろのものをを見つけ出すことができる。

Galela 族の人々にとって、方位はきわめて大切なものである。方位をはっきり認識せずしては一日なりとも生きてゆけないほどである。

(4) 相対的方位のあり方

このような *Galela* 族の相対的方位は、海と陸の対比にある。しかし、もしも、陸のみえない、海のまんなかに出たときはどうするのであろうか。あるいは、海のみえない内陸部など、海と陸の対比をなくしたとき、この相対的方位は使用されないのだろうか。

彼らの答は明確である。太陽ののぼる方向を海の方とみたとて、この相対的方位を用いるのである。すなわち、海側が東、陸側は西に、上方は南に、下方は北に一致させるのである。先に述べた絶対的方位は、この場面において利用される。*Galela* 族にあっては、絶対的方位は相対的方位の裏側にかくれて、普通は顕在化しない。相対的方位を用いることが難しくなったときに作動するともいえる。しかし、これはそれほど正しいことではない。確かに絶対的方位は相対的方位が用い難い場所で用いられるが、常に相対的方位の補助として用いられるばかりではないのである。陸が見えないような海において、あるいは新月の夜の海において、彼らは東の星 (*o ngoma bilatu*, 印をされた星、シリウスと推定される) を目印にして航行する。あるいは太陽の位置によって航行する。このことは、絶対的方位も独自の役割をもっていることを物語っている。

Galela 族にあっては、絶対的方位と相対的方位の二重の方位をもっているのである。

さて、それではなにゆえに東の方向を海の方方向にみたとするのであろうか。*Galela*

6) Baarda には *ngiye* (上方にいってしまえ!) という語はあげられていなかった。しかし、私のインフォーマントは、*ngiye* もこの中にあげていた。

族の中心地 Soa-sio はまさしく海の方が東であり、海岸線にある Galela 族の村々は、北西に傾く半島に点在し、大筋において、海の方が東である位置にある。勿論、先に海の方が東に一致するという考え方があり、そのために、それらが一致する場所に村をつくったとも考えられる。しかし、少なくとも村々の位置とは関連があるにちがいない。

では、海側に向かって、右を上方、左を下方とすること、あるいは、南を上方、北を下方とすることは、何によるのであろうか。Naidah によればテルナーテのスルタンに征服された Galela 族は、スルタンの方向、すなわち Galela からみて南の方位を上方としたと説明している [BAARDA 1895: 28]。これらについては、後に改めて考察することにしよう。

海と陸の方向が90度あるいは180度ずれて、海の方が北になったり、あるいは西になったりしたとき、東西南北の方位にかかわらず、海と陸の対比で方位が用いられる。それ故にこれらを相対的方位と呼ぶのである。東西南北のような絶対的方位が作動するのは、海と陸の対比が崩れたときだけである。ただし、180度も変化するような条件は、Galela 地方には現実にはないことに注意する必要がある。Galela の相対的方位は絶対的方位とほとんどの場合、恒常的な対応関係にあることは重要である。

さて、上方、下方は平面的方位としてあつてきたが、上方、下方はもともとは平面的な概念ではなく垂直的な概念である。この上・下という垂直的方向についても、平面的方向と同じようにあつかわれるのであろうか。

平面的には4方向に四分され、垂直的には上下に二分された空間的移动は十分に複雑であり、同時にそのことが、これまで調査し著者が理解していたことを検討できるよい機会であった。

今、垂直的上方だけをその問題として考えてみよう。垂直的下方は全く同様と考えてよいからである。たとえば、ココヤシや屋根にのぼるとき(図8のa)、igena (または kadake) といわれ、さらに上へのぼるときは idake、逆におりてくるときは(図8のb)、kudake といわれる。これは、自己の真上の場合であったが、たとえば山側で上方にのぼるときは、(図8のc)、idine

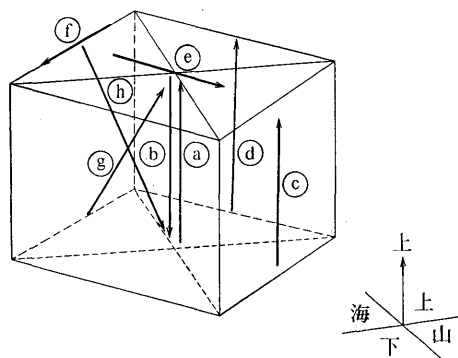


図8 垂直的上方と平面的4方向を組み合わせた立体的移動について

といわれる。同様に海側ならば、*idade*、平面的下方でならば、*idahe* といわれることになる。しかし、平面的上方で、上方にのぼるときは(図8のd)、自己の上方にのぼるとき(図8のa)と同様に *idake* とよばれることになる。ここにいたってインフォーマント達は議論をはじめた。彼らによれば、このような表現は可能ではあるが、実際に使用されることはないとの結論であった。次に、自己の上を、たとえば鳥や飛行機が海の方から陸の方にとんでいったとき(図8のe)、*sadake*、あるいは *sadoke* と表現される。後者は、空中をとんでいるため(すなわち、空の向こう側の意)である。そして、*sadake* よりも *sadoke* の方がより適切な表現であるという。逆に陸から海ならば *kodoke*、下方から上方ならば *idoke*、上方から下方ならば *kudoke* となる。しかし、もし海側で上方から下方に飛行機や鳥がとんだときは(図8のf)、*kudade* であるのか *kudoke* であるのか、あるいは *kudake* であるのであろうか。*kudoke* がもっとも適当ではあるが、これも実際的使用法ではないという。ならば、海にいた鳥がとびたち、頭上の木の上にとんできたとき(図8のg)、あるいは、海の方からとんできた鳥が自分のすぐ近くにおりてきたとき(図8のh)は、どう表現するのであろうか。可能性のある表現はさまざまあるが、このような斜めの方向は、これらの用語では表現できないという。もしなんらかの表現をするのならば、*sadade* が一番適当であるという。それは、平面的にとらえて、海の方からくるという表現である。このことは、山を下って海のある村にやってくる時の表現を思い出させる。すなわち、もし、下ることに重点がおかれると *kudine* と表現されるはずである。しかし、高低があろうがなかろうが、陸側から海の方に向かうときは、*kodine* である。斜めの方向は、平面的にとられるのである。また、平面的な斜めの方向、たとえば、海と平面的上方との中間の方向からこちらに向かってきたとき、その表現は不可能であり、どちらかの側に組み込まれてしまう。

立体的な空間で、これらの表現を検討してみた結果、垂直的上・下が用いられるのは、自己の真上、真下だけであり、その他の表現は可能であるとしても、実際には使用されず、また、*doke*、*gena* を用いて垂直的上・下と平面的上・下の混乱をさけるように使用されており、さらに平面的方向がこの表現に関しては中心となっていることが明らかになった。

(5) 実際の方位の使い方

概念としての民俗方位のあり方はほぼ明らかになった。これを実際の地名をさして、その用い方を検討してみよう。次にあげる例は、海がみえないときの方位のとり方、

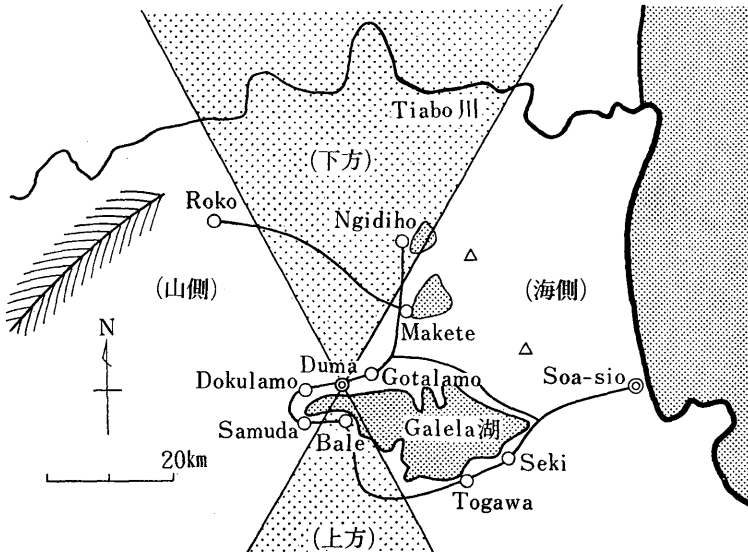


図9 Galela 地方の内陸部において (Duma 村を中心とした場合)

および、内陸にある湖が方位をとるときになんらの影響もあたえないかどうかを確かめるために行なったものであった。

この例は、Galela 地方の中心部である内陸部にある一村、Duma という村へ、それぞれの村からやってくる時、どのように表現するかを聞いたものである。

Duma からみれば、Soa-sio は海側にあり、かつ、はるか遠くにある。そのため、*sadai* (海から) と表現される。Gotalamo は、Duma のすぐ近くの村であり、海側に位置している。そのため、*sadade* と表現され、この 2 例は、これまで述べてきた構造から推定されるものと一致する。しかし、Makete は Soa-sio と同様に *sadai* といわれ、実際の方位 (北東) から明らかに海側 (東側) に寄って認識されている。さらに北側に位置する Ngidiho は、下方 (北) にあるゆえに *idahu* (下方から) と表現されることを考えれば、*sadade* にある Gotalamo を通って Makete にゆくゆえに *sadai* となるという説明は適切でない。

Duma の陸側 (西) に位置するすぐ近くの村である Dokulamo からは *kodine* (陸側から) と表現されるが、さらにまわりこんだ Samuda は実際には上方 (南) に傾いているにもかかわらず *kodine* と表現される。また、Makete から西方に入った村 Roko は、下方 (北) にあるにもかかわらず、*kodina* と陸側 (西) にあるように表現される。これらの例から考えると、4 方位は等しい角度の扇形に分けられるのではなく、海側・山側の方が、上方・下方よりも広い角度で認識されていると思われる。海側と山

側の方位は、上方や下方の方位よりも強く意識されているといってもいいであろう。

対岸にある Bale は *nodoke*, 湖をへだててある Togawa や Seki を *nodoka* というのは、これまでの例から考えて問題のないところである。

しかし、これらの例から、湖は海のかわりにならず、障害物としての機能しかもっていないこと、また、海がみえない内陸部においては、北東から南東に走る山脈を山側としているならば、Makete や Samuda はそれぞれ *idahu*, *kudake* になるはずであるが、実際にはそのようになっておらず、むしろ、太陽の位置で（あるいは星の位置で）海側や山側の方位がきめられていると考えられる。

次に、さらに遠隔の地方を同様の方法できいてきたとき、どのようになるであろうか。この場合の中心地は、Soa-sio である。

Soa-sio にとって、下方すなわち北側から Soa-sio にくる (*idahu*) のは、著者の住み込んだ Limau や、その北方にある Lalonga などの海岸線にならぶ村々である。陸側すなわち西方より Soa-sio にくるのは、内陸部の Galela 族の村々を除いてはない。Soa-sio から北西にのびる半島の西海岸側にある Loloda や Ibu, Tobaru 族などの村々は西方にはあるが、陸側あるいは西側からくるとはいわない。向こう側からくる (*nodoka*) という。一方 Kau 湾の対岸にある Lelei 岬や Lolobata なども同様に海の向こう側として *nodoka* が用いられる。さらに Maba や Buli 族などの住む、ハルマヘラ島の東南の半島も同様に *nodoka* と表現される。上方からすなわち南側から Soa-sio にくる (*kudaku*) のは、Tobelo や Kau など、ハルマヘラ島の北の半島の東海岸の Soa-sio より南側の村々である。ただし、Mamuya などの海岸線が北方に向く村々は、*nodoka* といわれる。さらに Weda などの南の半島も同様に上方から Soa-sio に来る (*kudaku*) し、西海岸の村々も同様であり、ティドレー島以南からバチャン島までの島々からも上方からくる。しかし、テルナーテだけは海からくる (*sadai*) という。

一方、モロタイ島はまさしく東側にあり、モロタイ島からくるときは *sadai* という。しかし、*sadai* はモロタイ島に限らない。はるか遠くのスラウェシ島、オビ島、スラ島、ブル島、セラム島やマンボン島も海からくるといふ。ジャカルタや日本からも同様である。しかし、イリアンは例外で、遠くであるにもかかわらず、上方からくるといふ⁷⁾。

これらの関係を地図上に示すと図10のようである。これは、Galela 族にとっての一種の空間認識と考えてもよいであろう。この図は、上方を南としているため、普通の

7) Baarda も同様の例をあげている [BAARDA 1895:28]。その中で、Papua にゆくときは *kadaku* (上方へ) としている。

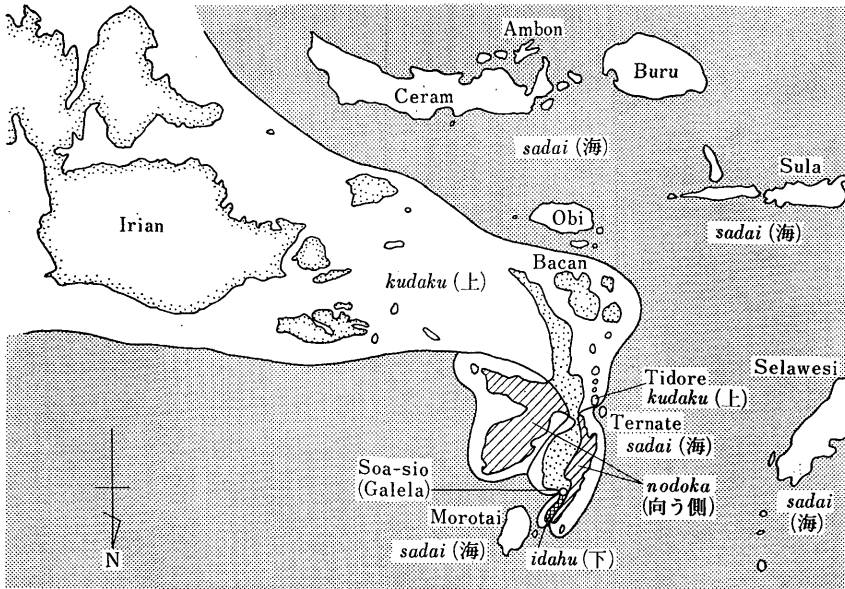


図10 Galela (Soa-sio) からみた世界の認識

地図を 180 度ひっくりかえした形になっている。彼らにとって、上は南であるため、わざとこのようにした。この方がより彼らの空間認識に近いと思われるからである。

この図は実に奇妙な図である。アンボンやスラウェシは実際には南方にいたり西方にいたりするにもかかわらず、海の方、すなわち東の方にあることになる。しかし、これを東の方と読みかえてはいけないのであろう。海の方というのは、彼らの空間認識の中で明確に位置づけられない場合に、用いた方向なのである。ハルマヘラ島および、テルナーテ島からバチャーン島にいたる狭義のモルッカ諸島、さらにイリアンを加えた地方は、彼らにとっては位置づけることができる既知の土地であり、それらより遠隔の地は、位置づけができず、実際に Soa-sio にやってきた方向、すなわち、海からの方向が、それらの地の方向になってしまったのであろう。

ところが、この地図からもわかるように、2 つの例外がある。1 つはテルナーテである。ティドレー島とテルナーテ島は接するほどに近い島であるにもかかわらず、テルナーテは *sadai* に、ティドレー島からは他の狭義のモルッカ諸島と同じく *kudaku* である。どうして、テルナーテだけが *sadai* であるのかを説明することは簡単なことではないが、テルナーテのスルタンの遠征とかかわりあいがあるのではないかと現在は考えている。

ともあれ、テルナーテから Galela の地にくるとき、海からくるといい方は重

要である。Galela 族の上方が南であるのは、スルタンが南の方位にあたるテルナーテににいるからであるという Naidah の説明とくいちがいをみせるからである。もし、彼のいうようであれば、テルナーテからは *kudaku* とならなければならない。Naidah の説は再検討してみる必要がありそうである。

もう1つの例外はイリアンである。イリアンもスラウェシ島やセラム島、アンボンなどに比して、決して近い位置にあるわけではない。それにもかかわらず、後者は海から (*sadai*) といい、イリアンは上方から (*kudaku*) という。

先に述べたごとく、上方にあてられているイリアンは彼らにとって既知の範囲に入っていると考えられる。しかも下方や向こう側ではなく上方として組み込まれている。

このことは、Galela 語が NAN に含まれる言語であり、Galela 語を含めた北部ハルマヘラの言語は、西イリアンのパプア系の言語である Vogelkop の言語 (Moi, Kalabra, Moraid, Madik, Karôn, Ajamaru など) と関係があるとの指摘 [COWAN 1957: 86-91, 1959: 151-161] を思い出させる。

(6) 民俗方位の意味

Galela 族の伝統的な生活を今にみることはきわめてむずかしい。現在では、コプラなどによる現金収入が大きく生活を支え、自給自足的な閉鎖された社会ではない。また、かつては死亡率も高く、一方で人の移動が活発であるため、伝統的なものを引きついでゆく力はそれほど強いものとは思われない。

また、民俗方位を検討するに際して、常にとりあげられる伝統的家屋も Galela 族の地には現在は見られない。儀礼らしい儀礼はわずかに残っているにすぎない。そのため、民俗方位を、彼らの伝統的な生活の中でとりあげることは Galela 族の場合きわめてむずかしいと思われる。

数少ない儀礼の中で、民俗方位とかかわる儀礼がないわけではない。たとえば、焼畑を開く際の農耕儀礼に、畑の中央に大きな1本の木 (*o gota ma karano*, インドネシア語では, *kayu raja* という) が残される。畑にされる土地の木を切りたおすとき、山刀でこの木に切り込みをつけ、その間にショウガを中心とした呪薬がはさみこまれる。そして、4方向からこの木に対して呪文がとな

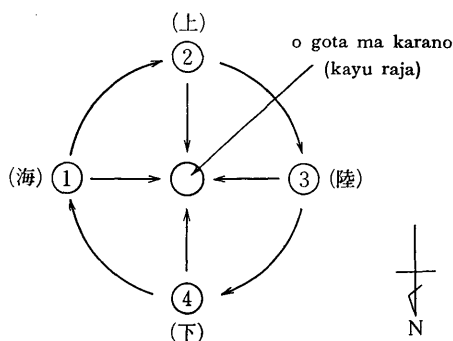


図11 呪文をとる方向

えられ、その後に畑になる土地にある木が切りたおされる。まずはじめに海側から、次に上方から、そして山側から、最後に下方から左回りに呪文がとなえられる。この順序は重要な方向の順序であるという。海側から山側に向かう方向がもっとも重要であり、ついで上方から下方に向かう方向ということである。海側が重要なのか、山側に向かうことが重要であるのかは不明である。また、この重要度そのものが、向きについて重要なのかも明らかでない。

また、墓地は海岸近くにある。村の中の海側にある。しかし、海側が死者の方向であるという話や、海に天国あるいは地獄があるというわけでもない。このように、形而上的な場面で、この民俗方位を問うことはむずかしい⁸⁾。

この民俗方位が生き生きと用いられている例を私達は、彼らの中でみることができる。それは、実用のレベルにおいてであった。

群をなして回遊している *jurum* という魚をとるとき、彼らは、数隻から十数隻の船での共同作業を行う。これらの船の先端には、巨大な三角網がつけられ、それを海中に下したままで魚を岸の方に追う。追いつめられた魚は、やがて、網に突入する。その瞬間に網を引きあげる。この追い込み漁業は、南の季節風が吹くときに、Lelei 岬にかけ、何日も、何週間も続けて行われる。Galela 族にとっては重要な漁業である。著者らが観察したのは村の近くであったためか、網をもたない船も、魚を追いこむために参加していた。この魚群を追い込むとき、まさに、これまで述べてきた民俗方位が活発に用いられる。むしろ、この作業中ほとんど民俗方位の語だけが飛びかっているといってよい。私達が「あっちだ」「こっちだ」と叫ぶに似ている。しかし、その正確さは私達のそれらの言葉の比でないのは当然のことである。

この民俗方位は、熱帯降雨林の中ではほとんど機能しない。「はるか上方で、海から山の方向に向かって」などといった表現は、見通しのきかない林の中では、いかほどの意味をもつであろうか。この民俗方位が機能するのは、見通しのきく場でなければ

8) 東部インドネシアにおいては、陸(山)側が天界、海側が下界と結びついている例が多くあり、Galela 族の場合も、同様の概念があったと仮定すると、Galela 族は Lukum 山に流れついた Baongono と Nurrgono の 2 人の男女からはじまるという神話、一方で海に墓地をつくるという事例はその仮定と矛盾するものではない。しかし、それ以上の資料をもち合わせていない。また左廻りの呪文をとなえる儀礼は、バリでの吉田の右廻り、左廻りの考察[吉田 1975a: 35-36]と関係はしているが、もとよりこの問題は複雑なもので、矛盾なく説明することの難しいものである。

著者の本論での力点はこの点にはない。それは現地における彼らとのかかわりの中で、まさしくこのような方位にかかわる価値観あるいは二分観というものが、彼らの文化や社会において重要な意味をもつとの実感がなかったことにもとづいている。一方で、切り方によればいかようにも解釈できる二分観を安易に用いたくないという意識が強い。そのため、このような論点からでなく、別の視点から民俗方位をとりあげようとしているのである。

ばならない。Galela 族の地にあつては、その場は海以外にはない。Galela 族の民俗方位は、単に海-陸との対比において方向がきめられるゆえに海が重要であるだけでなく、海においてこそはじめてその機能が発揮できるのである。先にみた *jurum* 漁は、その典型的なものである。

Galela 族の民俗方位は、きわめて強く海と結びついた概念である。海なくしては、この民俗方位は成立しないと考えられる。

また、陸側を示す *dina* は、舳先も意味し、海側を示す *dai* は船尾をも意味する。船が陸に向かったとき、舳先の *dina*、船尾の *dai* は、それぞれの場所の代名詞と一致する。このことも、先の点と無関係なことではあるまい。

4. ハルマヘラ島を中心とした地方の民族方位

Galela 族の民俗方位は、Galela 族のみにみとめられるものなのであろうか。あるいは、もっと広い範囲においてみとめられるものなのであろうか。比較の範囲をハルマヘラ島から狭義のモルッカ諸島、そしてスラ島にまで広げて、それぞれの民俗方位を検討してみることにしよう。これらの内、北部ハルマヘラ語族に属する Loloda, Tobaru, Tobelo は Galela 地方の Duma 村に移住してきた人々を対象として得た資料であり、南部ハルマヘラ語群に属す Maba については、同じく Galela 地方の Limau 村に移住、ないし寄留していた人々を対象として得た資料である。Ternate は、テルナーテで、北ハルマヘラ語族に属す West Makian および他の南部ハルマヘラ語群に属す East Makian, Weda, Patani, それにスラ・パチャン語群に属す Bacan, Sanana は、テルナーテに移住してきた人々を対象としている。Ternate を除いてはそれぞれの現地での調査ではないため、また比較的短期間の調査であったため、Galela 族で得たほどの精度はもとよりもとめようもないが、比較資料としては充分に使える資料であると考えている。

次に、各言語（方言）について中心となるインフォーマントを掲げておく。

Loloda: Ada Nusa (28才, 男), Duma 村在住。

Tobaru: Martinus Laike (45才, 男), Duma 村在住。

Tobelo: Albert Saibaka (49才, 男), Tobelo から Duma 村の中学校の先生として、赴任中。

Maba: L. H. Asar (45才, 男), Limau 村に寄留中。

Ternate: Hi. S. Radjilaen (約50才, 男), Ternate 在住。

- Makian: L. Radiiloen (約45才, 男), Ternate 在住。
Patani: Aisah Abdulrajak (18才, 女), Ternate 在住。
Weda: Mohammad Dji-Hoesin (56才, 男), Ternate 在住。
Bacan: Nova Soplantia (36才, 女), Ternate 在住。
Sanana: Hi. Abdal Wahab (55才, 男), Ternate 在住。

(1) Loloda 族の民俗方位

Loloda 族は Galela 族の西方の山の向こう側に住む人々である。そのため、海は西方に、陸は東方にあることになり、海、陸の方向は Galela 族とは正反対の方向になる。

さて、Loloda 族の民俗方位は、基本的には Galela 族のそれと同じである。

海側を *dai*, 陸側を *dina*, 上方を *daku*, 下方を *dauk* という。Galela 族の下方の *dahu* が *dauk* とわずかに異なるにすぎない。しかし、それぞれの近い海側、近い陸側などは、語頭に *me-* をつけることによって区別される。すなわち、*medauk*, *medake*, *medai*, *medine* となる。*medake*, *medine* は語尾の母音が Galela の場合のように変化している。この *me-* は「すでにある」の意であり、場所の代名詞の語頭につくとき、「近くの」の意になる。向こう側にあたる *doka*, *doke* は Loloda では *doka*, *medoke* となる。ただし、*doka* が付加語と組み合わせられるときは、*dokam* となる。

「ここ」、「そこ」に対応する語は、*menena*, *menege* と、やはり *me-* が付加されている。

「やってきつつある」という意味の *naga* も、同形で Loloda にも認められる。

一方、方向を示す付加語は、Galela の場合と異なって、語尾につく。下方から上方へは *-iye*, 上方から下方へは *-uku*, 海側から陸側へは *-isa*, 陸側から海側へは *-oko* が付加される。下方の *dauk* に付加された形を示すと、*daukiye*, *daukuku*, *daukisa*,

表 5 Loloda における場所の代名詞の分類

	遠				い		近	
	特定の方位をもつ				方位をもたない		手がとどかない	手がとどく
	下	上	海	陸	向こう側	やってきつつある		
近い	medauk	medake	medai	medine	medoke	—	menege	menena
遠い	dauk	daku	dai	dina	doka	naga		

表 6 Loloda における 民俗 方位 の 組合 せ 表

場所の 代名詞	付 加 語	方 向					場 所 原 形	指 示		
		客 観 的 方 向				自己中心的方向		単 に 指 示		同 じ を 指 示
		下→上	上→下	海→陸	陸→海	求心的		物	人	koma-
		-iye	-uku	-isa	-oko	-ino		me→ma	me→ma +oka	
dauk		+	+	+	+	+	+	-	-	+
medauk		+	+	+	+	+	+	+	+	+
daku		+	dakuku	+	+	+	+	-	-	+
medake		+	+	+	+	+	+	+	+	+
dai		daiye	daiku	daisa	+	daino	(daika)	+	-	+
medai		medaiye	medaiku	medaisa	+	medaino	(medaika)	+	+	+
dina		+	+	+	+	+	+	-	-	+
medine		+	+	+	+	+	+	+	+	+
doka		dokamiye	dokamuku	dokamisa	dokamoko	dokamino	(dokamika)	+	-	+
medoke		+	+	+	+	+	+	+	+	+
naga		+	+	+	+	-	-	-	-	+
menege		+	+	+	+	negeino	(negeika)	negeoka	+	+
menena		+	+	+	+	neino	(neika)	neoka	+	+

daukoko となる。こちらに向かうという求心の付加語は *-ino* を用いる。聞きもらしているが、あちらに向かうという遠心の付加語は恐らく *-ika* であろうと思われる。「それ」や「あれ」と指示を示す場合は、近い場所の代名詞しかないが、*me* を *ma* に変化させる。*madauk, madake, madai, madine, madoke* となる。「これ」、「それ」も同様に *manena, manege* となる。しかし、これらは物を指示する場合にしか用いられず、人を指示する場合は、語尾にさらに *-oka* を付加する。たとえば *madineoka* とする。指示する場合に、このように物と人とを区別することは、*Galela* にはなかったことである。「あれと同じ」と指示する場合は、語尾ではなく語頭に *koma-* をつける。この場合、物と人の区別はなされていない。

方位をもたない近くの場所の代名詞の場合は、少し異なった変化がみられる。方向の付加語と組み合わせられるときは、*menege* (そこ)、*menena* (ここ) が用いられ、近くを示す *me-* が付加されているが、求心的、および遠心的付加語には、*me-* は用いられず、*negeino, neino* となる。*neino* は *nenaino* の省略形と考えてよい。物の指示代名詞としては、*manege* と *manena* があり、人の指示には、*manegeoka, maneoka* が用いられる。*maneoka* も *manenaoka* の省略形であり、*nena* の “*na*” は省略される傾向が強い。「〜と同じ」と指示するときは *komanege, komanena* が用いられ、これは他の場合と同じである。単に「そこ」、「ここ」として場所を示すときは、他の場所の代名詞は原形が用いられるのに対して、これらには *-oka* が接尾され、*negeoka, neoka* となる。*-oka* は、人を指示するときに用いられた付加語であるとすれば、これはやや奇妙なことである。この点は後に少しふれなくてはならない。

さて、*Loloda* では、内陸部あるいは陸のみえない海上では、*Galela* と同様に特定の方位と結びついて、規定されている。陸側の *dina* が東に、海側の *dai* が西であることは明瞭である。*Galela* においては、海に向かって右側が上方の *daku* であった。ところが、*Loloda* では、右側が下方の *dauk* となり、上方・下方は、海に向かって右側あるいは左側としてきめられているのではないことがわかる。上方・下方は、そのような相対的方位によって決められるのではなく、絶対方位としての南北によって決められていると推測される。*Loloda* の上方 *daku* は、*Galela* の上方 *daku* と同様にともに南をさしているのである。

(2) Tobaru 族の民俗方位

Tobaru 族は *Loloda* 族と同様に北部ハルマヘラの *Galela* 族とは反対側にあたる西海岸部の、*Loloda* 族よりは南方に住む人々である。

まず Tobaru 族の民俗方位の例をあげてみよう。海側から陸側に向かうとき、遠くの海側からのときは *daisa*, 近くの海側のときは *daingisa* という。同時に他の方位においても遠近, 2つの表現があり *dinaoko* と *dinangoko*, *daiiye* と *daungiye*, *dakuku* と *dakunguku* のごとくである。これは2通りに解釈できる。すなわち, 場所の代名詞に遠近の2種があり (例, *dai* と *daing*), 方向の付加語には遠近はない。あるいは, 場所の代名詞には遠近の2種はなく, 方向の付加語に遠近の2種 (例, *isa* と *ngisa*) があるとする解釈である。Loloda でみたように場所を示すとき, 原形で用いられるのであればどちらの解釈が適当であるかの判断ができる。ところが, 場所を示す場合は *daika*, *daingika* のごとくなり, これによって判断することができない。

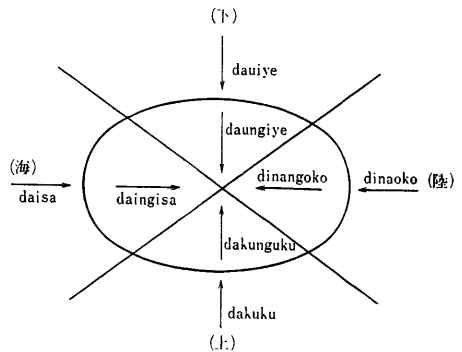


図12 Tobaru の民俗方位の例

それゆえに, これらの例から, ただちにいずれの解釈が適当であるかを判断することはできない。そこで, 形態的に理解しやすい後者の解釈をここではとっておき, 先に進むことにしよう。すなわち, 場所の代名詞として, 海側には *dai*, 陸側には *dina*, 上方は *daku*, 下方は *dau* の4つの代名詞がある。そして, 向こう側にあたる *doka*, およびやってきつつあるという *naga* がある。

付加語には, 遠近2種があり, 近い場所での方向を示す付加語は, 遠い場所での方向を示す付加語に “*ng*” を加えたものである。下方から上方へは, *iye* と *ngiye*, 上方から下方へは, *uku* と *nguku*, 海側から山側へは, *isa* と *ngisa*, 山側から海側へは, *oko* と *ngoko* がある。

Tobaru には, 求心的・遠心的な付加語も同様にみられ, 前者は *-ino* と *-ngino*, 後者は *-ika* と *-ngika* である。

場所を指示するときは, *-ika* と *-ngika* が用いられる。

指示代名詞としては, *-eda* を付加する。*daueda*, *daieda*, *dinaeda* のごとくである。あれと同じと指示するときは, 語頭にさらに *ko-* を付加する。*kodakueda* のごとくである。

4方位の場所については, ほとんど規則通りに付加されるが, 方位をもたない近い場所の代名詞については, 少し変則的である。

表7 Tobaru における民俗方位の組み合わせ表

場所の代名詞 付 加 語				遠 い						近 い				
				特定の方位をもつ				方位をもたない 向こうやってくる 側つつある		手がとど かない	手がとど く			
				上	下	海	陸	dau	daku	dai	dina	doka	naga	ge
方 向	客 観 的 方 向	下 ↓ 上	遠	iyē	+	+	+	+	+	+	+	—	—	
			近	ngiyē	+	+	+	+	+	+	—	gingiyē	ningiyē	
		上 ↓ 下	遠	uku	+	+	+	+	+	+	+	+	—	—
			近	nguku	+	+	+	+	+	+	+	—	gunguku	nunguku
		海 ↓ 陸	遠	isa	+	+	+	+	+	+	+	+	—	—
			近	ngisa	+	+	+	+	+	+	+	—	gingisa	ningisa
		陸 ↓ 海	遠	oko	+	+	+	+	+	+	+	+	—	—
			近	ngoko	+	+	+	+	+	+	+	—	gongoko	nongoko
	自 己 中 心 的 方 向	求 心 的	遠	ino	+	+	+	+	+	+	+	+	genano	—
			近	ngino	+	+	+	+	+	+	+	—	—	ningino
		遠 心 的	遠	ika	+	+	+	+	+	+	+	+	genaka	—
			近	ngika	+	+	+	+	+	+	+	—	—	—
場 所		遠	ika	+	+	+	+	+	+	—	—	geda	—	
		近	ngika	+	+	+	+	+	+	—	—	—	neda nangoka	
指 示		単に指示	eda	+	+	+	+	+	+	—	—	geena	neena	
		同じを指 示	ko	+	+	+	+	+	+	+	—	—	kogeena	koneena

「そこ」、「ここ」にあたる場所の代名詞は *ge*, *ne* である。これらに、方向の付加語をつけること、*gingiyē*, *ningiyē* や *gunguku*, *nunguku*, *gongoko*, *nongoko*, *gingisa*, *ningisa* のように母音が concordance を起す。求心的・遠心的な付加語が *ne* と組み合わせられる場合は *ningino* と concordance を起すが、*ge* の場合は *genano*, *genaka* となる。ただし、遠心的な付加語としての *ningika* は存在しない。（「ここからここへ」の意味になるため）。「そこ」というときは *genaka* ではなく *geda* が用いられる。それに対応する「ここ」というときは *neda* が用いられ、また *ningika* ではなくて *nangoka* といういい方もある。*oka* は、いわゆる「過去」を示す付加語であるが [FORTGENS 1928: 383], *nangoka* は「ここに」の意で用いられる。*eda* は指示の付加語ではあるが、*neda*, *geda* は指示よりもむしろ場所を示し、「ここに」、「そこに」の意であり、指示を示す語は、

neena, geena が用いられる。そして、同じと指示するときは *koneena, kogeena* が用いられる (*koneda, kogeda* も可能である)。

Tobaru では近い場所の代名詞 *ge, ne* は付加語と不規則な組み合わせ方をするが、基本的には Loloda 及び Galela とは同じと考えられる。

また、Loloda の場合と同様に、海と陸の対比が見失われたときは海側 *dai* は西に、陸側 *dina* は東に、上方 *daku* は南に、下方 *dau* は北に一致するようにとられる。

(3) Tobelo 族の民俗方位

Tobelo 族は、北部ハルマヘラの東海岸の Galela 族よりは南む住む人々である。恐らく、Tobelo 族は東海岸側ではもっとも多い人口をかかえており、またもっとも活発にハルマヘラ各地に移動している人々であろう。

Tobelo 族の民俗方位の例を図13に示したが、Galela と同様に4方位に遠近の2種があることは明瞭である。しかし、Tobaru でみたように、形態的に分離すると、場所の代名詞に遠近の2種(たとえば海側では *dai* と *dane*)、方向の付加語にも遠近の2種(たとえば海側から陸側へは *iha* と *ngiha*)があることになる。もし、それぞれに独立して2種の代名詞・付加語があるの

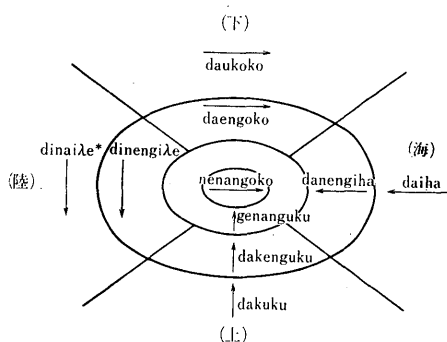


図13 Tobelo の民俗方位の例

であれば、4種の遠近が表現できることになる。しかし、実際には、Galela や Tobaru でみたのと同様に遠近2種の区別があるにすぎない。

この点に関して、Huetting⁹⁾の辞書は一つの可能性を考えさせる。Huetting によれば、近い場所の代名詞の *dae, dane, dine, doke* (*dake* にはないが) に対して *daena, danena, dinena, dokena* をあげている [HUETING 1908a]。この語尾の “ena” は中性の人称代名詞 “enanga” の省略形である [HUETING 1908a]。「ここ」、「そこ」を示す代名詞 *nenanga, genanga* の “enanga” と基本的に同じものである。この中性の人称代名詞を語尾につけることによって「近い場所」を示すようになったのではないであろうか。あるいは、“enanga” それ自身に「近い」の意味があるのかもしれない。いずれにせよ、*daena* は、*dau* に “enanga” が付加して *daenanga* が成立し、“nga” が省略さ

9) Tobelo 語の記載法は Huetting に従っている。^λ は、*l* と *d* の中間の音である [HUETING 1908: 5]。

れて *daena*, さらに “*na*” が省略されて単に *dae* となったのであろうと推測される。そして *daenanga* に方向の付加語, たとえば *uku* がつき *daenanguku* ができ, それから “*na*” が脱落して, *daenguku* ができたものと考えられる。この推測が正しければ方向を示す付加語に遠近 2 種があるのではないことになる。そして, このように考えることによってはじめに, 現実の Tobelo の民俗方位の構造を理論的に説明することができる。

しかし, もともとの形はそうであったとしても, 現在ある Tobelo 語ではたとえば, *uku* と *nguku* という 2 種の付加語があると考えた方が説明は容易である。というのは, Tobelo 語で付加語は語尾につくのが普通であるが, 時に語頭につくことがある。たとえば *ngokadina* (陸側に陸の方へ), *ngukudaku* (上方から下方へ) のような場合があり, これらは *ngoka-dina*, *nguku-daku* と分離するより方法はない。また Galela 語においても, よく似た形がある。それぞれの付加語に *ngo* とつけた場合である。*ngoku*, *ngosa*, *ngoko*, *ngono*, *ngoka* などがそれであるが, これらは Tobelo 語の *nguku*, *ngiha*, *ngoko*, *ngino*, *ngika* に対応するものであろう。

ただし, Tobelo や Tobaru において, 付加語に遠近の 2 種があったとしても, その表現することの内容は, Galela や Loloda と本質的には何も変わらないことは強調しておかなければならないであろう。

Tobelo においても求心的・遠心的な付加語があり, それぞれ, *ino* と *ngino*, *ika* と *ngika* が用いられる。そして, 場所を示すときはその原形あるいは *oka*, *ngoka* が用いられる。ただし, *gena*, *nena* は原形を用いず, 常に *ngoka* が付加された形で用いられる。*oka* (*ngoka*) は元来, 過去を示す付加語であるが, Tobelo では明確に場所を示すときには *oka* が用いられる。そして, *gena*, *nena* は常に *ngoka* をともなっており, Tobaru の *nangoka*, Loloda の *negeoka*, *neoka* と対をなしたものと考えられる。また, Tobelo の *ika*, *oka* は Galela では *ka* となり区別されない。そのため, Galela の場所を示す *ka* は, Tobelo の *oka* に対応したものと考えることもできる。一方, Tobaru の場合を見ると, 場所を示すときは *ika* が用いられており, Galela の *ka* は遠心的付加語の転用とも考えられる。それゆえ, Galela の場所を示す *ka* は, 過去の付加語からの転用か, あるいは遠心的付加語の転用かを現在の段階ではきめることはできない。

さらに, 「同じ」と指示する付加語も, *gena*, *nena* のみに付加し, *kogena* (*kokogenanga*), *konena* (*kokonenanga*) しかない。

なお, Tobelo では東西南北はそれぞれ *o wange ma nyonyie*, *o wange ma hohor*, *o kore hara*, *o kore mie* という。そして, 南が上方と一致するは Galela と同様である。

表8 Tobelo における民俗方位の組合せ表

付 加 語			場所の代名詞		遠 い										近 い			
					特定の方位をもつ								方位をもたない				手がとどかない	手がとどく
					下		上		海		陸		向こう側		やってきつある			
					遠 dau	近 dae	遠 daku	近 dake	遠 dai	近 dane	遠 dina	近 dine	遠 doka	近 doke				
														naga	gena	nena		
方 向	客 観 的 方 向	下↓上	遠	ile	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	—	
			近	ngile	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	+	
		上↓下	遠	uku	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	—	
			近	nguku	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	+	
		海↓陸	遠	iha	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	—	
			近	ngiha	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	+	
		陸↓海	遠	oko	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	—	
			近	ngoko	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	+	
	自 己 中 心 的 方 向	求 心 的	遠	ino	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	—	—	—	
			近	ngino	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	+	
		遠 心 的	遠	ika	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	—	—	—	
			近	ngika	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	+	
場 所		原 形		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	—	—	—		
		遠	oka	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	—	—	—		
		近	ngoka	—	+	—	+	—	+	—	+	—	+	—	genangoka	nenangoka		
指 示	単に指示		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	gena	nena		
	同じを指示		ko	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	+	+		

* dau は, dauk として組み合わせられる ** 同母音が重なるときは, その一つを省略する

(4) Modole 族の民俗方位

Modole 及び Pagu は NAN に属し, Tobelo と接している。Modole は山地民で、海とかかわりのあるこれらの民俗方位がどのような形であるかは興味のあるところであるが、私自身の資料はもち合わせていない。Modole および Pagu については Ellen の集めた語彙集 [ELLEN 1916a, 1916b] がある。それから、関係ある部分を取り出し、少しく検討してみる。[] 内は Tobelo 語を示す。

Modole 語では：

da'u [*daku*] 上方あるいは南方
daue [*daena*] 下方のここ
do'ango'o [*dokengoko*] 海のかなたへ
do'angu'u [*dokenguku*] 北方のかなたへ
do'angiye [*dokengiye*] 南方のかなたへ
do'ai'a [*dokaika*] かなたへ
'ado'a [*kadoka*] かなたに
gena'a [*genangika*] そこに
genade [*genangide*] 上方へ

Pagu 語では：

dokaja [*dokena*] 遠くないそこに
neena [*nenanga*] ここ、今日、これ

Pagu では 2 語しかみられず、資料としては余りに少なすぎる。そのため、Modole についてのみ検討してみよう。

Modole の場合の代名詞としては、*da'u*, *daue*, *do'a*, *gena* の 4 つがみられる。付加語としては、*ngo'o*, *ngu'u*, *ngiye*, *'a*, *de* の 5 種がみられる。付加語については、*ngo'o* に対応する *ngiha* (陸の方へ)、*'a* に対応する求心的な付加語 *no* があるのであろうことが推定される。なお、Ellen の *genade* [*genangide*] は正しくは *genaiye* [*genangiye*] ではないかと思われる。

Modole の住む地域は Kau 川の上流であり、Kau 川は北から南に向けて流れている。それゆえ、上・下が川上・川下に対応するのであれば、上方が北になるはずである。ところが、*da'u* は、上方であるとともに南方でもある。上・下は川の流れとかかわりなく設定されていると考えられる。このことは、海と陸の対置を川上・川下におきかえたのでもなければ、上と下の対置を川上・川下に合わせているのでもない。む

しろ、Tobelo などと同様の概念が Modole にもみられることを物語っている。

それにしても、海側や陸側の代名詞がみられず、むしろ、doka に対応する「向こう側、かなた」の例が多く採集されていることは、興味深いことである。

(5) Ternate 族の民俗方位

Ternate は、ハルマヘラ島の西方にある小さなテルナーテ島を中心として住んでいる人々であり、ハルマヘラ島、狭義のモルッカ諸島中ではもっとも早くから開けたところである。マレー語も同様に早くから入り込み、Ternate 語とともに用いられていたと思われる。マゼランの航海記の中に、Ternate で採集した語彙があげられているが [ピガフェッタ 1965: 633-646]、そのほとんどはマレー語である。

15世紀頃にはイスラム教徒はテルナーテ島に入りはじめ、スルタンを主とした王国を形成していたと考えられる。ただし、テルナーテにだけスルタンがいたのではなく、となりの島のティドーレ島にもスルタンがいたし、バチャーン島にもいた。そして、ハルマヘラ島のジャイロロにもスルタンがおり、4人のスルタンがこのあたりにいたという。しかし、テルナーテのスルタンがもっとも力があり、北部ハルマヘラの諸族はテルナーテのスルタンに従っていた。そのため、ハルマヘラ、特に北部ハルマヘラにおいては、Ternate 語のしめる位置はきわめて高かったという。

さて、Ternate の方位に関する概念は、これまでに述べたものとは少し異なっている。そこで、ややくわしく述べることにしよう。

場所の代名詞は、海側の *dai*、山(陸)側の *dia*、上方の *daku*、下方の *dahu*、「あそこ」および「向こう側」の *daka*、「そこ」の *kage*、「ここ」の *kane* からなる。なお、*daka* はもともと向こう側の意味であったと思われるが現在ではむしろ「あそこ」の意味の方が強い。これはマレー語またはインドネシア語の影響かと考えられる。そして、これに対応する付加語は、下方から上方に向かう *ije*、上方から下方に向かう *tara*、海側から陸側に向かう *isa*、陸側から海側に向かう *hoko*、求心的な付加語 *ino*、遠心的な付加語 *ika* などからなる。これらの語彙は Galela や Tobelo と同系統であることは一目瞭然である。しかし、これらの組合せによるシステムは異なった点がある。

特定の方位をもつ付加語は、場所の代名詞の前後どちらでもつく。しかも、前につく場合と後につく場合では意味が異なる。たとえば、自己のいる場所から海の方に向かうときは、陸側から海側に向かう *hoko* と海側の *dai* を組み合わせて *hokodai* という。同様に上方に向かうときは *iyedaku*、下方に向かうときは *taradahu*、山側に向かうときは *isadia* という。ところが、たとえば海側から、こちらにくるときは、*daiisa* と後に

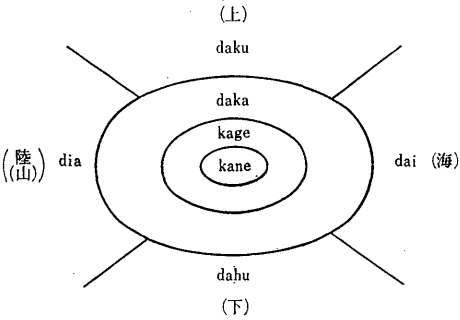


図14 Ternate における空間の分割

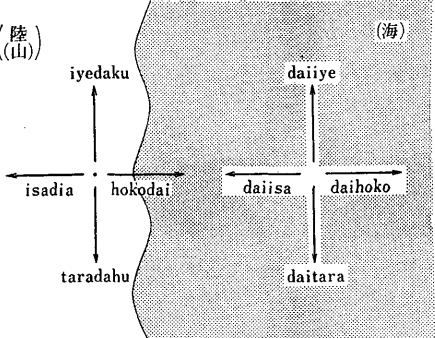


図15 Ternate における民俗方位の例

付加される。そして、海側で、上方に向かうときは *daiye*、下方へは *daitara*、さらに海側に向かうときは *daihoko* と表現される。この表現は、これまでに述べてものとは、相当に異なっている。Ternate では、方向を示す付加語が前にあるとき、場所の代名詞の示す位置へ向かうことを示し、逆に付加語が後にあるときは、場所の代名詞の示す位置から向かうことを示している。*hokodai* は、「陸側から海側へ、海の方に向かう」ことを示し、*daiisa* は「海側から陸側へ、海の方から向かう」ことを示している。前

表 9 Ternate における民俗方位の組み合わせ表

場所の代名詞				下	上	海	陸	あそこ (向こう側)	そこ	ここ	
				dahu	daku	dai	dia	daka	kage	kane	
付 加 語											
方 向	客 観 的 方 向	上 ↓ 下	目的	tara-	+	-	-	-	+	+	-
			起点	-tara	+	+	+	+	+	+	-
		下 ↓ 上	目的	iye-	-	+	-	-	+	+	-
			起点	-iye	+	+	+	+	+	+	-
		陸 ↓ 海	目的	hoko-	-	-	+	-	+	+	-
			起点	-hoko	+	+	+	+	+	+	-
	海 ↓ 陸	目的	isa-	-	-	-	+	+	+	-	
		起点	-isa	+	+	+	+	+	+	-	
	自 己 方 向 中 心	遠心的	ika-	-	-	-	-	+	+	-	
		求心的	-ino	-	-	-	-	+	+	-	
場 所		原 形	+	+	+	+	+	+	+	+	
指 示	単に指示	ena-	+	+	+	+	+	enage	enane		
	同じを指示	doka	+	+	+	+	+	dokage	dokane		

者の例は今までになかった例である。これまでならば、遠心的な付加語 *ka* あるいは *ika* が用いられるところであった。

Ternate では、遠心的な付加語 *ika* は前におかれ、次の場所の代名詞の方へゆくことを示す。しかし、方位をもつ場所の代名詞には付加せず、*daka*, *kage* のような方位をもたない場所の代名詞のみに付加する。同様に、求心的な付加語 *ino* は後に付加し、前にある場所の代名詞の方からくことを示すが、*ika* と同様 *daka* と *kage* のみに付加することができる。*ika* や *ino* は方位をもたない付加語であるが、これと組み合わせられるのは方位をもたない場所の代名詞のみであることもこれまでの例とは異なった点である。

また、「ここに」を示す *kane* はこれらの付加語とは組み合わせられず、このことは暗黙の内に *kane* が中心になっていると考えられる。

指示を示す付加語 *ena* が場所の代名詞の語頭に付加され *enadia*, *enadahu* のような形になる。「同じ」を示す付加語 *doka* も場所の代名詞の語頭に付加され、*dokadai*, *dokadahu* となる。ただし *kane*, *kage* は少し異なる。*kane*, *kage* は *ka+ne*, *ka+ge* と考えられ、この *ka* は場所を示す付加語であろう。そのため、指示を示す付加語 *ena* と組み合わせられるときは、*enane*, *enage* となり、*doka* と組み合わせられるときは *dokane*, *dokage* となる。

場所を示すときは、この *kane*, *kage* を含めて原形が用いられる。

Ternate においても、方位をもつ場所の代名詞は、東西南北と強く結びついている。テルナーテの町では海側 *dai* は東に、陸(山)側 *dia* は西に、上方 *daku* は北に、下方 *dahu* は南に対応している。テルナーテ島の北岸にある村では、*dai* は北に *daku* は西に *dia* は南にそして *dahu* は東になる。テルナーテの町のある反対側(西海岸)では、すべての方位が180度反転する。このように、Ternate では、その位置によっていずれの方位とも結びつけられる。しかし、海・陸の対比を失ったときはテルナーテの町での対応がとられる。

Ternate では、これまでに述べた例とは異なり、上方 *daku* が北に一致する。これはスルタンの居城の位置にかかわっていると考えられる。テルナーテの町から、スルタンの居城は北方にあると同時に山側によっており、実際にやや小高い位置にある。どの方向からであれ、スルタンの城にいくときは上方にのぼるという。

テルナーテの町の人々にとって北に向かうことはスルタンの城の方向に向かうことであり、それが同時に上方にのぼることになる。そして、いつしか、スルタンの城に向かう方向を上方というようになった。スルタンの城よりも北方にある村々の人々と

っては、今でもスルタンの城にゆくときは上方にのぼるというが、町にゆくときは下方に下るといふ。

この話はなにゆえに上方が北であるかの説明であったが、同時にやや興味深い点が別にもある。すなわち、山の方にのぼること、上方にのぼることとがさほど明確に区別されていない点である。

Ternate の人々にいろいろの方位についてきく際に、おもしろい例にぶつかる。*diatara* (山側で上方から下方に向かう) を *diahoko* (山側からおりてくる) の意として話す人々もいる。また、*isadia* (山側に向かう) というべきところを *iyedia* (山側にのぼる) という人々もいた。テルナーテ島は、陸側といわず、山側というほどに、山がきわだった島であり、陸側に向かうとすぐにのぼりはじめなければならない。このような地形が、*ie* は「のぼる」、*tara* は「おりる」の意として、山側の *dia* と組み合わせられる用例を生み出したものと考えられる。Galela でみたような明確さは Ternate ではない。ただし、*diatara* という人に *diahoko* とどちらが適当であるかとたずねれば、多くの人はい *diahoko* をとる (それでも *diatara* の方がいいという人もいるが)。

テルナーテのように山がきわだったところでは、上方・下方が往々にして、山側・海側ととりちがえられることが起こるようである。

(6) West Makian 族の民俗方位

Makian 島はテルナーテ島とバチャーン島の間位置し、島の西半分は NAN の West Makian 語が、東半分は、AN の East Makian 語が話されている。小さな島で両系統の語が用いられている特異な例の一つであろう。

West Makian は Ternate の場合とほとんど同じである。

「ここ」に対応する *sine* を中心とし、「そこ」にあたる *soma*、「あそこ」にあたる

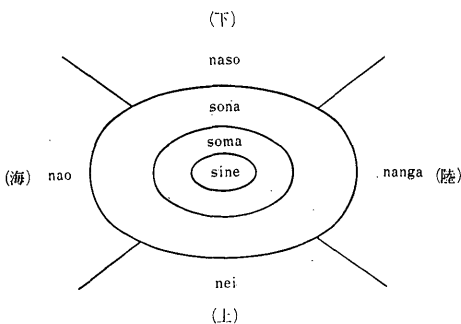


図16 West Makian における空間の分割

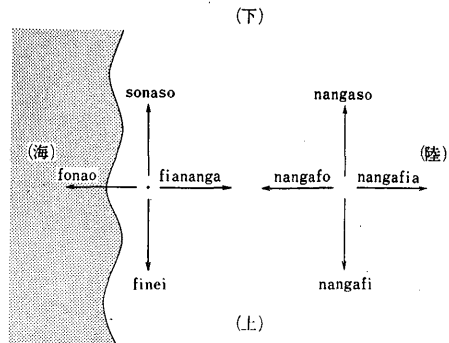


図17 West Makian の民俗方位の例

sona の3つの場所の代名詞は特定の方位をもたず、その外側に海側の *nao*、陸側の *nanga*、上方の *nei*、下方の *naso* の4つの場所の代名詞がある。付加語としては、海側から陸側に向かう *fia*、陸側から海側に向かう *fo*、上方から下方に向かう *so*、下方から上方に向かう *fi* の4種がある。

付加語が後につくとき、その場所の代名詞から付加語の方向に向かい、付加語が前につくとき、その場所の代名詞の方向に向かうことを意味する。たとえば、自己のいるところから陸の方向に向かうことは *fiananga* といい、逆に陸の方から自己の方に向かうときは *nangafo* という。

Ternate にみられた求心的・遠心的な付加語はみられず、また向こう側にあたる語もみいだせない。しかし、場所の代名詞の空間分割の中心部は、*Galela* や *Tobelo* にみられる二分ではなく Ternate でみたように三分され、インドネシア語の *sini* (ここ)、*situ* (そこ)、*sana* (あそこ) に対応する *sine*、*soma*、*sona* がある。そして、これらの代名詞の内、Ternate と同様に *sine* (ここ) を除いて、先に述べた付加語と組み合わせられる。

場所を示すときは、単独で用いず、*soso-* を語頭に付加する。*sosonei*、*sosonaso* のごとくである。方位をもたない場所の代名詞は、*sesine* (ここに)、*sosoma* (そこに)、*sosona* (あそこに) となる。

指示代名詞は、*sine*、*soma* にあたるものしかなく、*mine* (これ)、*mema* (それ) のみ

表10 West Makian における民俗方位の組み合わせ表

場所の代名詞 付 加 語			下	上	海	陸	あそこ	そ こ	こ こ	
			naso	nei	nao	nanga	sona	soma	sine	
方 向	上 ↓ 下	目的	so-	+	—	—	—	+	+	—
		起点	-so	+	+	+	+	+	+	—
	下 ↓ 上	目的	fi-	—	+	—	—	+	+	—
		起点	-fi	+	+	+	+	+	+	—
	陸 ↓ 海	目的	fo-	—	—	+	—	+	+	—
		起点	-fo	+	+	+	+	+	+	—
	海 ↓ 陸	目的	fia-	—	—	—	+	+	+	—
		起点	-fia	+	+	+	+	+	+	—
場 所		soso-	+	+	+	+	sosona	sosoma	sesine	
指 示	単に指示	—	—	—	—	—	—	mema	mine	
	同じを指示	—	—	—	—	—	—	hopa	faine	

である。また、「～と同じ」と指示する代名詞も *faine* (これと同じ), *hopa* (それと同じ) しかない。

これらの語彙はこれまで述べてきた北部ハルマヘラの言語とはかなり異なったものであることは注目される。

West Makian では、海側は西に、陸側は東に、そして上方は南に、下方は北に対置される。ここでも、Galela や Tobelo と同じように上方が南であった。

(7) East Makian 族の民俗方位

East Makian 族の民俗方位の構造は基本的には、West Makian と変わらない。しかし、特に語彙は West Makian とは異なっている。

まず、場所の代名詞は、中心に *anne* (ここ), その外側に *addia* (そこ), その外側に *noge* (あそこ) がある。そして、海側の *lawe*, 陸側の *lewe*, 上方の *yase*, 下方の *pope* がある。付加語としては、海側から陸側に向かう *kle*, 陸側から海側に向かう *kla*, 上方から下方に向かう *tia*, 下方から上方に向かう *po* の 4 種がある。付加語は、場所の代名詞の前後につき、その位置による意味の変化も West Makian と同じである。ただし、*noge* には前につくことはなく、後にだけつく。

この *noge* は、「あそこ」の意であると述べたが、恐らくは, *soma*, *sine* と並置され

表11 East Makian における民俗方位の組合せ表

場所の代名詞 付 加 語			下	上	海	陸	あそこ (向こう側)	そ こ	こ こ	
			yase	pope	lawe	lewe	noge	addia	anne	
方	上 ↓ 下	目的	tia-	+	—	—	—	+	—	
		起点	-tia	+	+	+	+	+	—	
	下 ↓ 上	目的	po-	—	+	—	—	+	—	
		起点	-po	+	+	+	+	+	—	
向	陸 ↓ 海	目的	kla-	—	—	+	—	+	—	
		起点	-kla	+	+	+	+	+	—	
	海 ↓ 陸	目的	kle-	—	—	—	+	+	—	
		起点	-kle	+	+	+	+	+	—	
場 所			do-	+	+	+	+	noge	addia	anne
指 示	単に指示		—	—	—	—	—	(addia)	(anne)	
	同じを指 示		(t-)	—	—	—	—	taddia	tane	

るものではなく、もともとは、「向こう側」をさしていたものと思われる。たとえば、*yase*（下方）に対応して *yama*（下方にゆく）という動詞があり、同時に *pope*（上方）には *poma*, *lawe*（海側）には *lama*, *lewe*（陸側）には *lema* という動詞があるように *noge* には *noma* という特定の方向をもたない移動を示す動詞がある。また、先に述べたごとく、付加語は語頭としか組み合わせられないこともこのことを想像させる。

場所を示す付加語は *do* が用いられる。*do-lawe*, *do-lewe* のごとくである。ただし、*anne*（ここに）、*addia*（そこに）、*noge*（あそこに）は原形のままで用いられる。同じと指示する代名詞は *tane*（これと同じ）*taddia*（それと同じ）しか認められない。方位をもつ場所で、同じを示すときは、*dai do-lawe*（海側のあそこでのように）と一語では表現できない。

East Makian においては、海側は東に、陸側は西に一致する。そして、上方は West Makian と同様に南、下方は北に一致する。ここでも上方は南である。

(8) Maba 族の民俗方位

Maba は南部ハルマヘラの南東に張り出した半島の北岸に住む人々である。現在では、東北に張り出した半島にも多く移住している。

Maba 語では中心に *pice*（ここに）、その外側に *pitah*（そこに）があり、その外側に海側の *polau*, 陸側の *polei*, 上方の *poya*, 下方の *popop* がある。1 人のインフォーマントは、これらの近い場所を示す語として、*poleimai*, *polaumai*, *poyamai*, *popopmai* があると述べたが、他のインフォーマント達は、一致して “*mai*” を付加した語は丁寧語であるという¹⁰⁾。私は後者をとっている。この他に向こう側にあたる *poli* がある。一方、付加語には、海側から陸側に向かう *-nei*, 陸側から海側に向かう *-nau*, 上方から下方に向かう *-pop*, 下方から上方に向かう *-nya*, 求心的な付加語である *-ni*¹¹⁾,

10) Maba 語では丁寧語がいろいろある。場所の代名詞と付加語の組合せにおいても、*popoceyama* < *popopceyama* < *popopyama*, あるいは、*pice nyama* < *piceyama* のように “*p*” の省略や、“*ce*” あるいは “*n*” の付加は丁寧でないいい方であるという。

11) 場所の代名詞、付加語、動詞は次のような構成になっている。

原形	pop	ya	lau	lei	li	
po	popop	poya	polau	polei	poli	場所の代名詞
n	pop (npop)	nya	nau (nlau)	nei (nlei)	ni (nli)	付加語
ma	—	yama	lama	—	lima	動詞

本来、*pop* や *ya*, *lau*, *lei*, *li* がもともとの代名詞であると考えられるが、*po* を付加した形が代名詞に用いられている。

表12 Maba における民俗方位の組み合わせ表

場所を示す語			下	上	海	陸	向こう側	そこ	ここ
付加語			popop	poya	polau	polei	poli	pitah	pice
方向	下→上	-nya	+	+	+	+	—	+	+
	上→下	-pop	+	+	+	+	—	+	+
	海→陸	-nei	+	+	+	+	—	+	+
	陸→海	-nau	+	+	+	+	—	+	+
	求心的	-ni	—	—	—	—	+	+	+
場所	原形		+	+	+	+	+	+	+
指示	単に指示	tai-*	+	+	+	+	+	tatah tah	taice ce
	同じを指示	faitai-*	+	+	+	+	+	faitah	faice
動詞	上↔下	-yama	+	+	—	—	—	+	+
	海↔陸	-lama	—	—	+	+	—	+	+
	くる	-lima	+	+	+	+	+	+	+

* tai, faitai との組合せでは、語尾に mai がつくことが普通である。場所の代名詞と、方向の付加語の組合せにおいて、その間に “ce” “cen” がはいることが多い。

指示を示す付加語 *tai-*、同じを指示する *faitai-* がある。

4つの特定の方位をもつ付加語は、向こう側にあたる *poli* を除いた代名詞の語尾に組み合わせられ、Ternate や Makian のように、前後の付加する位置によって意味が変わるようなことはなく、Galela でみたのと同様の表現ができる。付加語 *-ni* は特定の方向をもたない場所を示す語 *poli* (向こう側), *pitah* (そこに), *pice* (ここに) の語尾につき, *polini* (向こう側からこちらへ), *pitahni* (そこからここへ), *piceni* (ここへ) の意味になる。ただし、Maba には Ternate の *ika*(〜へ) に対応するものは聞かれなかった。

指示代名詞をつくるときは、*tai-* を語頭に付加し、*taipopmai*, *taiyamai*, *tailamai*, *tailemai*, *tailimai* となる。ただし、「それ」、「これ」にあたる語は *taice* あるいは単に *ce* のみ、*tatah* あるいは *tah* のみで用いられる。同じであると指示するときは、これらに *fai-* をつける。そのため「それと同じ」は *faice*, 「これと同じ」は *faitah* となる。

また、それぞれの方向をもつ動詞がある。海-陸の方向への移動は *lama* (*polau* に対応する) 上-下の方向への移動は *yama* (*poya* に対応する), *poli* に対応するこちらに向かう移動は *lima* といい、これらは方向を示す付加語のかわりに、同じく語尾につけて同様の意味で用いられる。これらに4方向のないことは注目されることであり、*yama*, *lama* は離れてゆく方向に、*lima* は近づいてくる方向への移動として対立

している。

なお、東西は聞きもらしたが、南を *simi*、北を *moruopo* という。

(9) Weda 族の民俗方位

Weda 族は、南ハルマヘラの南の半島部に住む人々である。中心は東海岸であるが、一部は西海岸にも住んでいる。

Weda においては、Maba と基本的には同じである。場所を示す語は、中心に *poce*、その外側に *pote*、さらにその外側に、海側の *polau*、陸側の *polei*、上方の *poya*、下方の *pope* がある。方向を示す付加語は海側から陸側への *nelei*、陸側から海側への *nelau*、上方から下方への *nope*、下方から上方への *neya* があり、これらを組み合わせることによって Galela でみたような表現ができる。ただし、場所の代名詞と付加語の間に “se” が加えられる。また、*poce* とは組み合わせられず、そのため、自己からはなれてゆくときは、特別のいい方がある。

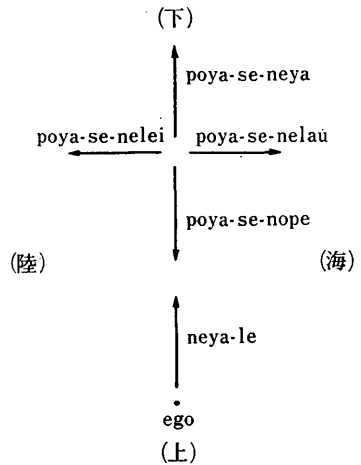


図18 Weda の民俗方位の例

場所を示す語ではなくて、方向の付加語に *le* が付加された語が独立して用いられる。

Maba でみられたような、海-陸の方向の移動を示す *yama*、上-下の方に移動する *lama*、方位をもたずに移動することを示す *lima*¹²⁾ の3種の動詞があり、これらも場所を示す語と組み合わせられて用いられる。ただし、*lima* は *pote*、*poce* とは組み合わせられない。

指示を示すには *n* が付加される。*nle*、*nce* のごとくであるが、*poya* や *pope* などにも付加され *npoya*、*npope* などを形成する。ただし、同じと指示する場合は、方位をもつ場所を示す語ではなく、*nle*、*nce* に対して *faje* の一語しかないという（方位をもつ

12) Maba と同様に次のようにして、方位・位置に関する語が形成されている。

原 形	pe	ya	lau	lei	(li)	
po	pope	poya	polau	polei	(poli)	場所の代名詞
ne	nope (nepe)	neya	nelau	nelei	(neli)	付加語
ma	—	yama	lama	—	lima	動詞

lima に対応する *poli*、*neli* は聞きとっていないが、Weda にはこれらの語がある可能性は高い。Maba と同様に *pe*、*ya*、*lau*、*lei* がもとの代名詞であると考えられるが *po* の付加した形が代名詞として用いられている。

場所では *dodo polau*〔海でのように〕の形になる)。

(10) Patani 族の民俗方位

Patani については、十分に資料を集められなかった。参考資料として示すにとどまる。

Patani は、南東に張り出した半島の先端部から南岸にかけて住む人々である。

Patani の「ここに」は *pica*, 「そこに」は *pitah*, 「あそこに」は *timah* という。上方は *piyama*, 下方は *pipoma*, 海側は *pilama*, 陸側は *pilema* という。これらは West Makian の場合とよくにている。そして、下から上へは *nya*, 上から下へは *pop*, 海から陸へは *nei*, 陸から海へは *nau* という。恐らくは、これらの語と先の場所を示す語とは組み合わせられると思われるが、この点は確かめていない。

実際に下方から上方にくるときは, *napi poma-yama* という。*napi* は「くる」の意である。「ゆく」は *fan* であり, *fan poma-yama* といえば, 下方から上方にゆくことをいう。同様に, 上方から下方は *yama-yama*, 海側から陸側へは *lama-lama*, 陸側から海側へは *lema-lama* という。これらの語の後につく *yama*, *lama* は Maba や Weda では動詞としてあつかってきた語であり, 前につく語は場所を示す語である *poma*, *yama*, *lama*, *lema* である。

表13 Weda における民俗方位の組み合わせ表

場所を示す語			下	上	海	陸	そ こ	こ こ	(～へ)	
付 加 語			pope	poya	polau	polei	pote	poce	-le	
方 向	下→上	neya	+	+	+	+	+	—	+	
	上→下	nope	+	+	+	+	+	—	+	
	陸→海	nelau	+	+	+	+	+	—	+	
	海→陸	nelei	+	+	+	+	+	—	+	
場 所		原 形	+	+	+	+	+	+	—	
指 示	単に指示	n	+	+	+	+	n	nte	nce	—
	同じを指示	—	—	—	—	—	faje		—	
動 詞	上↔下	yama	+	+	—	—	+	—	—	
	海↔陸	lama	—	—	+	+	+	—	—	
	方向なし	lima	+	+	+	+	—	—	—	

場所の代名詞と方向の付加語の間には *se* が挿入される。

Patani の方位の構造は資料不足のためまだ理解できない部分が多いが、Maba や Weda に近似のものであることは想像できる。

なお、Patani では、東を *morla*, 西を *pit*, 南を *simi*, 北 *muanopo* という。

(11) Buli 族の民俗方位

Buli については、私自身の調査資料はない。Maan の資料 [MAAN 1940] を用いて、少し検討を加えておく。もとより、私の資料との直接の比較は難しいが、参考になる点も多い。

Maan のあげた例は次のようなものである。

lau: 海の方

latau: (話者から離れて) 海の方へ

malau: (話者の方に) 海の方へ、(話者の方へ) 岸から海の方へ

polau: 海の方に

[*lei*: 陸の方]¹³⁾

lalei: (話者から離れて) 陸の方へ、海において陸の方へ

malei: (話者の方に) 陸の方へ

polē: 陸の方に

[*li*: かなた]

lali: かなたへ

malī: こちらへ

polī: あそこに

nap: 下方へ, Buli から北の方へ

nais: 上方へ, Buli から南へあるいは西へ

nata: (話者から離れて) あちらへ

fan la: 話者から離れてゆく (= *fāu lali*, *fān lalau*)

tai: これ (= *taie*)

tane = *taine*: ここ

ca: あれ (= *cia*)

na: あれ (= *tina*)

tina: あそこ

13) [] で示した語は Maan の項目にはないものであるが、*lau* の例にならうならば、[] の項も成立するはずである。しかし、Maba や Weda で示したように、*lei* や *li* の原形では用いられないようである。

これらの資料から、まず、下方が北に上方が南(西)に対置されることがわかる。Buli 族の住む場所を考慮すれば、海側は東に、陸側が西に対置されるであろう。上方が西になるのは、海側が南になることが Buli 族の地では起り得るからである。

「海の方に」という場合は *polau*, 「陸の方に」は *polei* (Maan は *polē* としているが, *polei* の方が適当であろう) という。上, 下はやはり “*po-*” のついた形が想像されるが不明である。ただし, *nap*, *nais* の変化した形であることは確かであろう。また, *la-* は, 話者か

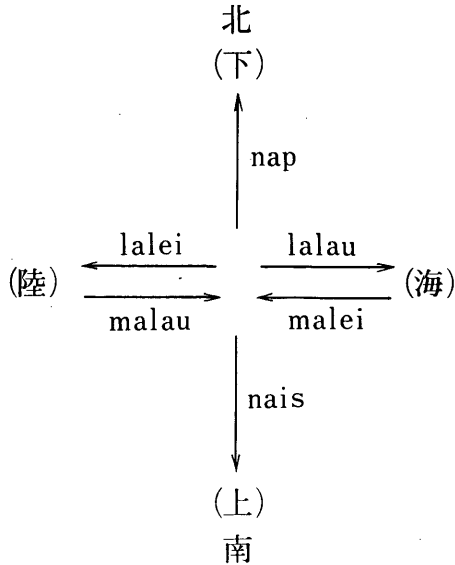


図19 Maan の資料による Buli の方位

ら離れていき, *ma-* は話者に近づく付加語であるらしい。*nap*, *nais* の *na* は, 上・下の方向に話者から離れてゆく付加語かもしれない。*nata* (あちらへ) の *na* もこれらと関係のあるものと思われる。

lei, *lau* に対応する *li* があることがわかる。「かなた」あるいは「向こう側」という意味である。*la-*, *ma-*, *po-* などの付加語とも同様に組み合わせられる。

また *tai* (これ) は *tane* (ここ) に対応して, *na* (あれ) は *tina* (あそこ) に対応する。Weda や Maba の例を考えれば, むしろ *ca* (あれ) が *tina* (あそこ) に対応するのかもしれない。

さて, Maan の資料から, Buli においても, 下は北に, 上は南に対置され, 海-陸, 上-下の4つの方位があることは明らかであり, 語彙の点からも Maba や Weda と深くかかわっていることが読みとれるが, その方位の構造については, 今一つ, 明らかではない。

なお, 東西南北は, それぞれ *morla*, *pāt*, *simi*, *pulat* といい, Patani や Maba とほとんど同じ語彙が用いられている。

(12) Bacan 族の民俗方位

Bacan は, パチャン諸島に住む人々であり, その言葉は南ハルマヘラ語群とは異なった語群であり, Bacan 語は, マレー語にきわめて近い言語のようである。

海側は *lau*, 陸側は *daya*, 上方は *ata*, 下方は *bawa* という。「ここ」に対しては *ini*, 「そこ」には *itu*, 「あそこ」には *cana* が対応する。場所を示すときは *in* を付加し, *ilau*, *indaya*, *iyanta*, *inbawa*, *incana* となるが, *ini*, *itu*, には *de* が付加され, *deini*, *deitu* となる。

海に向かうときは *ka lau*, 陸に向かうときは *ka daya* と, *ka* をともなって方向を示す。この *ka* はインドネシア語の *ke* とほとんど同じと考えてよい。ところが, インドネシア語の *dari* (～から) にあたる語はなかった。たとえば, ここからというとき, *deini kacana* (ここで, あそこへ) というわけばならない。*deini* だけでは, その地点をさすことになり, *kacana* をとることによって, *deini* が「ここから」の意味になる。

「上方で海側に向かって」を *iyanta ka lau* というが, この *iyanta* はまさしく場所を示している。同様に「上方でさらに上方に向かって」は *iyanta ka ata* という。ところが, 「上方からここへ」という場合は *iyanta de ata* が用いられる。これは, *iyanta de ata kamari* から *kamari* (インドネシア語 *kemari*, こちらへと同じもの) を省略したものと考えられ, *de ata* は, 先にみた *deini* と同様に「上方から」の意味になるの

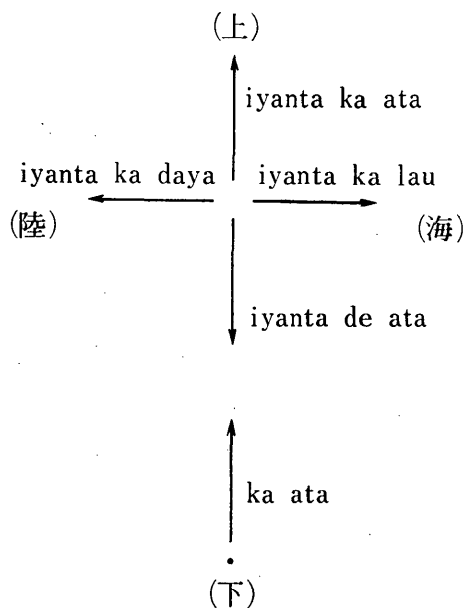


図20 Bacan の民俗方位の例

であろう。*de* は場所を示すと同時に, 方向の起点をも示す語であると考えられる。

Bacan では, これまでにみたような方位をもつ付加語は認めがたい。“*ka* (～へ)”と“*de* (～に, ～から)”および“*in* (～に)”の付加語あるいは前置詞と場所の代名詞が組み合わされて表現されるにすぎない。

(13) Sanana 族の民俗方位

Sanana 族は, ハルマヘラ島の南西の方向にあるスラ島に住む人々であり, 言語的には, Bacan 語と同系統と考えられている。

Sanana の方位のとり方は, Bacan よりももっと単純である。「ここ」は *saik*, 「そこ」は *saneka*, 「あそこ」は *samana*, 海側を *fai*, 陸側を *tema*, 上方を *lepa*, 下方を *neo*

という。Sanana には Bacan と同様、方位をもつ付加語はなく、インドネシア語の *dari* (～から), *ke* (～へ) にあたる語もない。あるのは、場所を示す前置詞 *bo* (～) の一語である。そのため、これに動詞を加えることによって方向が表現される。たとえば、「海の方にゆく」は *laka bo fai* (*laka*: ゆく, 時に *bo* も省略されて単に *laka fai* という), 「陸側からくる」は *bia bo tema* (*bia*: くる, 単に *bia tema* とという) という。このため、「上方で海側に向かう」というような表現はほとんどできないことになり、実際にこのようないい方は用いられない。

5. 民俗方位の構造の類型と語彙

ハルマヘラ島から狭義のモルッカ諸島, スラ島までに範囲を広げて, それぞれの民俗方位の構造を検討してきた。これらの地域において共通する点は, 海側, 陸側, 上方, 下方の4つの相対的方位が認められることであった。それ以外の点では, いろいろの変異があるが, それらは互いに全くばらばらの相関関係のないものではなくて, いくつかのグループにまとめることができる。すなわち民俗方位の構造を類型化すると3つないし4つに分けることができる。

まず, Galela に代表されるタイプがある。もっとも重要な特徴は, 4つの方位をもつ場所の代名詞において, 遠近の2分があること, および, 4方位の方向の付加語で構成される概念と求心的・遠心的付加語によって構成される概念との二重構造になっていることである。その他の特徴としては, 向こう側という概念が明確であり, しかもそれを越えてきたり, いったりする概念があること, 比較的近い場所においては, 遠近2種の場所の代名詞があること, さらに, 方向をもつ付加語はいずれの場所の代名詞とも組み合わせられる点などであろう。このタイプをとりあえず北ハルマヘラ型と名づけよう。

北ハルマヘラ型に含まれるものは, Galela をはじめ, Loloda, Tobaru, Tobelo などである (Modole もこの型に含まれると考えられる)。これらの内, 普通は付加語が場所の代名詞の語尾につくが, それが語頭につく Galela だけは少し異なっている。また, Loloda は場所の代名詞の語頭に *me-* が付加され, その遠近が形成されている点は他と異なる。Tobaru と Tobelo はこの中では, 形態的にみればきわめて近い関係にあると考えられる。

北ハルマヘラ型を一方の極とすると, もう一方の極は Sanana や Bacan の場合であろう。このタイプでは, 方位のある場所の代名詞に遠近の区別がなく, 方向をもつ付加語もなく, また近い場所の代名詞にはインドネシア語と同じように3種類がある

表14 民俗方位の類型

A 1	4方位の付加語をもつ……………	(B)
B 1	4方位の場所に遠近の区別がある……………	北ハルマヘラ型
B 2	4方位の場所に遠近の区別がない……………	南ハルマヘラ型(C)
C 1	4方位の付加語が、場所の代名詞の前後につきその意味を変える…	マキアン副類型
C 2	4方位の付加語は、場所を指示する語の後につく……………	マバ副類型
A 2	4方位の付加語をもたず、4方位の場所に遠近の区別はない……………	スラ・パチャン型

ことであろう。これをスラ・パチャン型とよぶ。この中で、特に **Sanana** は、場所を示す前置詞 *bo* があるのみで、他はゆく・くるの動詞を組み合わすしか方法のないきわめて単純なものである。一方、**Bacan** には、インドネシア語の *ke* にあたる *ka* がみられる。しかし、インドネシア語の *dari* に相当する前置詞はなく、場所を示す前置詞が併用されている。

この中間のものをまとめて南ハルマヘラ型とよぶ。このタイプのものは、スラ・パチャン型と同様に場所の代名詞に遠近の区別はないが、方向をもつ付加語がある点によってスラ・パチャン型とは区別できる。南ハルマヘラ型は、その付加語が場所の代名詞の語尾のみにつくサブタイプと、場所の代名詞の語尾・語頭について意味の異なるサブタイプに分けることができる。それぞれのサブタイプの代表的なものをとって、前者をマキアン副類型、後者をマバ副類型とよぶことにしよう。マキアン副類型には、**Ternate**, **West Makian**, **East Makian** が、マバ副類型には **Maba** と **Weda** が含まれ、**Patani** や **Buli** もこの副類型に含まれるであろう。

さて、これらの類型を語彙の比較をも加えて、その関係を考えてみよう。

北ハルマヘラ型は構造だけではなく、語彙の点からも、きわめてまとまりのよいタイプであることがわかる。ところが、南ハルマヘラ型のマキアン副類型は、構造的には比較的よくまとまっているのに対して語彙は相当に異なっている。**Ternate** は北ハルマヘラ型の語彙であるし、**East Makian** は南ハルマヘラ型ではあるがマバ副類型の語彙ときわめて近いものである。**West Makian** は、そのどちらにも近くない語彙からなっている。特に **Ternate** は、限定された使い方ではあるが求心的・遠心的付加語をもっており、向こう側にあたる *daka* もある。方位をもつ場所の代名詞に付加して指示代名詞を形成するし、「同じ」と指示する代名詞をもつことができる。これらの点を考えれば、**Ternate** は、マキアン副類型に含まれてはいるがきわめて北ハルマヘラ型に近いものといえるであろう。

語彙としては、**Ternate** は北ハルマヘラ型に、**East Makian** はマバ副類型と同系統のものと思われるが、付加語が場所の代名詞の語尾・語頭について意味が異なると

表15 場所の代名詞(場所を示す語)の比較

言語(方言)	遠 い											近 い		
	特定の方 位 を も つ										特定の方 位 を も た ない			より遠い
	上		下		海		陸		向こう側		やってくる つつある		手がとど かない	手がとど く
	遠い	近い	遠い	近い	遠い	近い	遠い	近い	遠い	近い				
Galela	daku	dake	dahu	dahe	dai	dade	dina	dine	doka	doke	naga	—	gena	nenā
Loloda	daku	medake	dauk	medauk	dai	medai	dina	medine	doka	medoke	naga	—	menege	menena
Tobaru	daku		dau		dai		dina		doka		naga	—	ge	ne
Tobelo	daku	dake (dakena)	dau	dae (daena)	dai	dane (danena)	dina	dine (dinena)	doka	doke (dokena)	naga	—	gena	nenā
(Modole)	da'u			daue					do'a				gena	
Ternate	daku		dahu		dai		dia		daka		—	daka	kage	kane
West Makian	nei		naso		nau		nanga				—	sona	sona	sine
East Makian	yase		pope		lawe		lewe		(noge)		—	noge	addia	anne
Maba	poya		popop		polau		polei		poli		—	(poli)	pice	pitah
Weda	poya		pope		polau		polei				—		poce	pote
Patani	piyama		pipoma		pilama		pilema				—	timah	pitah	pice
(Buli)					polau		polei		poli		—		tina	tane
Bacan	ata (iyanta)		bawa (inbawa)		lau (ilau)		daya (indaya)		(cana, incana)		—	cana (incana)	itu (deitu)	ini (deini)
Sanana	lepa		neo		tema		fai		—		—	samana	saneka	saik

表16 方向, 位置などの付加語の比較

言語 (方言)	方 向 を 示 す												場所を示す		指 示 す る		備 考
	特 定 の 方 向								不特定の方向				遠い	近い	単に指示 する	同じを指 示する	
	下→上		上→下		海→陸		陸→海		求心的		遠心的						
	遠い	近い	遠い	近い	遠い	近い	遠い	近い	遠い	近い	遠い	近い					
Galela	i(ye)		ku		sa		ko		no		ka		ka		ma (ge)	koma	
Loloda	iye		uku		isa		oko		ino		ika		原 形		ma ma-oka	koma	
Tobaru	iye	ngiye	uku	nguku	isa	ngisa	oko	ngoko	ino	ngino	ika	ngika	ika	ngika	eda	koeda	
Tobelo	ile	ngile	uku	nguku	iha	ngiha	oko	ngoko	ino	ngino	ika	ngika	原 形 oka ngoka		(原形)*	(ko)*	* 4 方位 の場所には ない
(Modole)		ngiye		ngu'u				ngo'o			'a						
Ternate	iye		tara		isa		hoko		ino		ika		原 形		ena	doka	
West Makian	fi		so		fia		fo		—		—		soso		(mine mema)*	(faine) (hopa)*	*同上
East Makian	tia		po		kle		kla		—		—		do		(anne addia)*	(t)*	*同上
Maba	nya		pop		nei		nau		ni		—		原形 (po)		tai	faitai	
Weda	neya		nope		nelci		nelau		—		—		原形 (po)		n	(faje)**	** 一語し かない
Patani	nya		pop		nei		nau		—		—		原形 (pi)				
Bacan	—		—		—		—		—		(ka)		in, (de)		(原形)*	(im)*	*Tobeloの 項に同じ
Sanana	—		—		—		—		—		—		(bo)				

いう構造に関しては、それらの類型と同じとは思われない。マキアン副類型というのは、このような意味ではきわめて特殊なものと思われる。しかも、それらが、狭義のモルッカ諸島に集中していることは、この地域の特殊性であることを推測させる。

一方、マバ副類型は語彙においてはよいまとまりを示しており、他の特徴、たとえば、陸と海の方角の移動を示す *yama*、上方と下方の移動を示す *lama* そして、特別の方角をもたない *lima* の 3 種の動詞がみられることもよく一致している。また地域的にもよくまとまっており、マバ副類型は、北ハルマヘラ型と同様にまとまったタイプである。

これらの類型を通覧してみると、スラ・バチャン型は他の 2 つの類型よりかなりはなれたものであると考えられる。残り 2 つの類型の溝も決して浅いものでない。特に北ハルマヘラ型とマバ副類型とは、ともにまとまりのよい類型であるが、付加語の形成の仕方、動詞などの特徴をも合わせて考えると、その溝は浅くはない。それに対して、マキアン副類型はその両方にまたがる特殊な類型であると考えられる。しかも、このマキアン副類型を除けば、これまでの言語の分類とよく一致する。すなわち、北ハルマヘラ型は NAN に含まれる北部ハルマヘラ語族に、マバ副類型は AN ではあるが、むしろポリネシア的要素の強いと推測される語群に、そして、スラ・バチャン型は、スラ・バチャン亜語群とよく一致している。残るマキアン副類型は、まさしく問題のあるグループである。

6. 4 つの方位について

ハルマヘラ島およびその周辺部においての絶体的方位と相対的方位の関係をみてみると、Ternate を除いて、すべて上方が南に一致している。このことは、Galela のところで述べたように、テルナーテのスルタンの方向を上方とするという説には賛同できない現象である。逆に Ternate の場合は、町とスルタンとの居城との関係で再編成された可能性が高い。

とすれば、何故、南方が上方なのであろうか。この問いに答えられる資料をただちに提供する状態にはない。しかし、南が祖先の方向、すなわち南方からハルマヘラに移り住んできたのではないかとの想像は、それほど突拍子なものではないであろう。このような可能性をも含めて、さらに資料を収集して検討してみる必要があると考えている。さて、東西が海陸の方角に対応しており、それぞれの地形によってどちらの方角をとるかが決せられている。ところが、単に地形的にとらえるならば、南北に海

陸の方向があっても理論的にはそれほど奇妙なことではない。それにもかかわらず、東西が海陸の方向に対応していることは注目すべきことである。

この海陸の方向の中で、**Galela** 族の方位の中でみたように、遠隔の地では陸の方からくる人々はなかった。**Galela** にとって陸側にあたる **Loloda** や **Tobaru** の人々は、向こう側

表17 絶体的方位と相対的方位

絶体的 方位 言語(方言)	東	西	南	北
Galela	海	陸	上	下
Loloda	陸	海	〃	〃
Tobaru	〃	〃	〃	〃
Tobelo	海	陸	〃	〃
Modole	?	?	〃	〃
Ternate	海	陸	下	上
W. Makian	陸	海	上	下
E. Makian	海	陸	〃	〃
Buli	〃	〃	〃	〃
Sanana	〃	〃	〃	〃

からやってきた人々であり、陸側からやってきた人々とはいわなかった。どうして、陸側からやってきたとはいわないのであろうか。

この問題に関連する2つの報告がある。1つはセラム島内陸部に住む民族の民俗方位 [イェンゼン 1972] であり、今1つは小スンダ列島中のフローレンス島の東方にあるルンバタ (**Lembata**) 島に住む **Kedang** 族の民俗方位 [BARNES 1974] に関する報告である。

セラム島西部の内陸部に住むいわゆるアルフル族では、海側を *lowau*、陸側を *lodaya*、海側に向かって右側を *lodi*、左側を *lori* とよぶ方位をもっている。この方位は、これまでに述べてきた筋道からいえば相対的方位と位置づけられるものであるが、セラム島民にとっては、実にこの方位が絶体的方位であり、あたかもセラム島の海岸線がどこまでも平行に走っているようにとらえられている。ことばをかえていえば、陸側には、どこまでも広がる大陸があるととらえている。一方、太陽は同一地点においても登る位置が異なり、場所が変われば太陽の登る位置は変化すると考えられており、太陽の登る方向を絶対的な方位としてはとらえられていない。そのため、島の反対側にある村々は、左右どちらかに位置づけられることになる。そして、陸側は、人の住む土地ではなく、精霊と想像上の生物の土地と考えられている [イェンゼン 1972: 169-175]。

この例では、**Galela** 族にみられたような太陽による絶対的方位をかいており単一の方位しかもたず、かつそれが絶対的な方位として認識されている。この点では、**Galela** 族の民俗方位とはきわだって異なったものである。イェンゼンの示した例をみる限り、セラム島民がこのような方位の認識をしていることを多少の疑問がありな

からも認めざるを得ないであろう。この例は、時間の観念あるいは季節の観念をもたないため、同一地点での太陽の登る位置（あるいは月の登る位置）の規則的な変化をとらえることができなかった例であり、あるいは、時間の観念と太陽の登る位置が関係づけられて認識されなかった例であろう。同時に、山の斜面に住んでいて、常に海が見えるという条件、さらにセラム島が島であることを認識する手だてをもたなかった（山に登らないこと、船をもっていないことなど）ことが重なって、このような特異な方位の認識を導いたと考えられる。そのため、この例から「このような定位法は大陸のある地域で発達し、そこからもちこまれたとする方がはるかに蓋然性が高い」[イェンゼン 1972: 180] といえるかどうか疑問のあるところである。むしろ、このような特殊な条件の中で形成された特殊な方位と考えた方がより蓋然性が高く、セラムにおいて特殊に適応した例なのであろう。

ところで、イェンゼンの例は、陸から人がこないことの一つの説明にはなる。Galela 族では、かつて陸の方向は精霊の住む世界として認識されていたのかもしれない¹⁴⁾。

Kedang 族の場合は、イェンゼンほどに納得のいく説明がなされているとは考えら

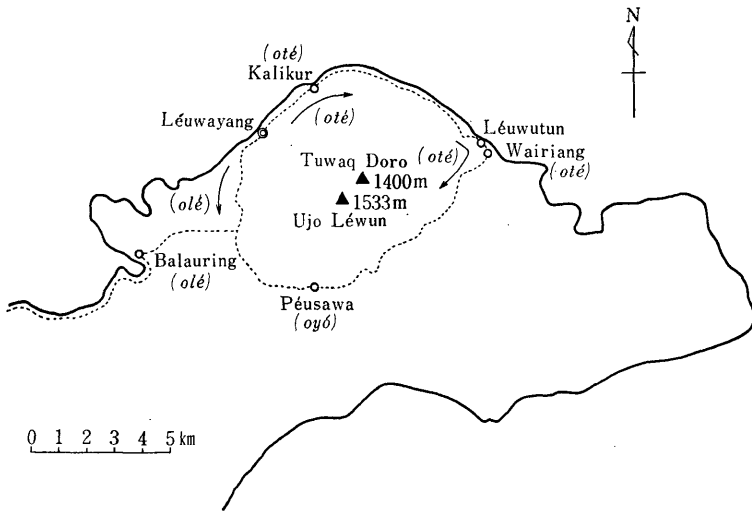


図21 Leuwayang を中心とした Kedang 族の方位の例

方位の記載されている村だけ記入してある。実際には、山のまわりに多くの村がある。この図は [BARNES 1974: 8] からとったものである。

14) Galela には *toka* や *meki*, *iburis*, *pontianak* などいろいろの悪霊がいるが、必ずしも森にいるとは限らない。しかし、かつては、森に多くいた可能性は高い。

しかし、陸の方に悪霊がいるという考え方は、バリなどの陸（山）の方が天界と結びつく考え方と矛盾しないのであろうか。

れず, Barnes の得た結論は, 再検討する必要がある。Kedang 族では5つの方位の名称がある。*oté*, *loé* は1組の方位をもち, *oté* は「高い」と山に対して「右」の2つの方位をもち, *olé* はそれに対して「低い」, 「左」の方位をもつ [BARNES 1974: 71-82]。*oli* は「上」, *owé* は「下」, そして *oyo* は上下ではなく, 側方の左右いずれかの方位をさす [BARNES 1974: 85] という。Kedang 族の場合, きわだって高い山があり, 方位はこの山を中心にしてとられる。*oli*, *owé* は側方には用いられず, 「上方」, 「下方」としてのみ用いられる。これまでに述べたことから, *oli* は山側, *owé* は海側の方向と考えてまずまちがいない。そして, *oté*, *olé* はそれぞれ上方と下方と考えられる。それゆえに Léuwutun からみて Wairiang の方が土地が低いにもかかわらず, *oté* (上方) と表現することが可能である [BARNES 1974: 81]。そして, 高い山が中心にある Ternate ですでに述べたように, 山側から海側へ向かうときに, 上方から下方へと表現したり, あるいは海側から山側へ向かうときに, 下方から上方へと表現することがあることを思い起せば, Kedang においても, 実際の上下として, 山の斜面の山側(高い方)を *oté*, 斜面の海側(低い方)を *olé* と表現していたと推測される。そして, 側方の特定でない(左でも右でもない)方向としての *oyo* は, 向こう側と考えられる。Barnes は, 先に述べたイェンゼンの例のように, 山の方向を絶対的な方位として Kedang 族がとらえていると考えている [BARNES 1974: 84] ため, *oyo* が向こう側であるとは考えもしていない。ところが, Kedang 族は, 南北の方位の語はもたないが, 東を *timur*, 西を *waraq* という東西の方向の語をもっており, しかもその方位が太陽および季節風の方向と関連してとらえられており [BARNES 1974: 79], 海側, 山側の方位を絶対的な方位としてとらえているとは思われない。そして, 山をとりまいて村々があることを彼らは認知していたと考えられる。*oyo* の例として, まさしく Léuwajang の山の裏側にあたる Péusawa をあげていることもこのことを裏書きしている。

Kedang 族の場合は, セラム島民の場合とは異なったものであり, むしろ Ternate の例に近いものである。Barnes は, 側方の方位が上方, 下方という方位であり, それが山の斜面の上下にも転用されるということを明確に把握しなかったことが彼を迷わせた原因であり, 一方, セラム島民のように海側・山側という方位が Kedang 族にとって絶対的方位であると考えたことによって, *oyo* という方位が向こう側であるということを気付かせなかったものであろう。Kedang 族の方位の認識は, このような方位の認識の仕方であらうと今一度, 検討される必要があると思われる。

さて, Galela 族において陸側から人はこないということは, 陸には, あるいは山

や森には本来、人が住んでおらず、そのかなた、山の向こう側には人が住んでいるという認識があること、そして山や森の中は精霊の住む世界であると考えていたかもしれないことを示していると思われる。

7. お わ り に

ハルマヘラ島からスラ島にまでおよぶ範囲において、海側、陸(山)側、上方、下方の4つの相対的な方位が認められた。そして、ルンバタ島の Kedang 族においても、同様の方位があると考えられる。またセラム島の西方にあるブル島においても、「上方へ」を *rélé*, 「上方から」を *firété*, 「下方から」を *paofohi*, 「ここに」を *dognâ*, 「そこに」を *dogni*, 「ここから」を *fima*, 「そこから」を *fini*, 「～から」を *fili* などという例 [JELLESMA 1875] は、同様の方位の認識があることを想像させる。

海側、陸(山)側の方位をもつ人々はさらに広く認められる。たとえば、フローレス島の Sikka 族では、海側を *lau (na)*, 上方(陸側)を *reta (na)*, 海に向かって右側を *le (na)*, 左側を *wawa (na)* といい、同じくフローレス島の Lio 族では、海側を *de lău*, 上方(陸側)を *da gele*, 海に向かって右側を *da gale*, 左側を *da gawa* という [CALON 1893: 200-208]。ティモール島の Atoni 族においては、南(右)側を *ne'u*, 北(左)側を *ali'*, 東を *neonsaen*, (太陽がのぼる), 西を *neontes* (太陽が沈む) という方位がみられ [CUNNINGHAM 1964: 36], ティモール島の南西にあるロティ (Roti) 島においても Fox によれば海側、陸側の方位があるという [BARNES 1974: 80]。またロンボク島の Sasak 族では、北を *daya*, 南を *lauq*, 東 *témuq*, 西 *barat* という方位がある [倉田 1972: 130]。

このように東インドネシア一帯には広く海側・陸側の方位をもつ民族が知られており、さらに倉田のあげるインドネシア各地 [倉田 1972: 125-131], 合田のあげるフィリピン各地 [合田 1976: 89-90] の民族も同様の方位をもっている。また、このような方位の認識は太平洋地域にもみられるようである [TREGEAR 1969; MEGEE 1899]。

ハルマヘラ島の民族方位は、このような広がりの中で、相互になんらかの関連をもった方位の認識の一つである。すなわち、海と陸の対比による方位のとり方は、従来は AN において認められていたものであるが、NAN に属す北部ハルマヘラ語族にまでその範囲を広げなければならない。しかも、非常に複雑な構造の方位をもち、その意味では北部ハルマヘラ語族の民俗方位はきわめて特異なものである。そして、そ

れは単に北部ハルマヘラ諸族に限らず、南部ハルマヘラ諸族の民俗方位も、AN の中でも特殊な認識といえるであろう。NAN, AN にかかわらず、ハルマヘラ島には特殊な民俗方位が存在するということである。そして、Galela 族でみたように、この方位の認識は海ときわめて強い相関関係をもつものである。

どうして、このような方位の認識がハルマヘラにみられるのであろうか。特に、この方位の認識は、ハルマヘラにおいて発達したものか、あるいは、かつては広くみられたものの残存なのであろうか。この問いに答えることは難しいが、しかし、民族移動のかなめにあたる位置にあることと何らかの関係があることであろう。いずれ、この問いに私は答えたいと考えている。

ハルマヘラの民俗方位に関するこの研究は、その民俗方位の構造を明らかにし、方位の認識の仕方にいくつかの類型があり、それらが非常に特殊なものであることを示した。しかし、その過程でいろいろの問題点を摘出してきた。その意味では、この研究は新たな問題を提出することに意味があるのかもしれない。

謝 辞

本研究の遂行にあたって、多くの方々のお世話になった。多くのインフォーマントの紹介の労をとって下さった Pattimura 大学の Soukotta 氏、現地の Suwondo 氏をはじめとする Limau 村の方々、Duma 村の村長 W. Thomas 氏をはじめとする Duma 村の方々、また私の調査に快く応じて下さった多数の方々、さらにこの調査を可能にして下さった LIPI をはじめとする現地の各政府機関に対して感謝の意を表したい。また、別刷をお送り下さった倉田勇先生、文献に関して御援助下さいました馬淵東一先生、崎山理先生に深謝する。そして、本調査をともにに行い、帰国後も研究会を続けている調査隊のメンバー、石毛直道隊長をはじめとする佐々木高明教授、和田祐一教授、松澤員子助教授、大胡修助手には、さまざまな形でもっともお世話になった。記して感謝の意を表したい。

文 献

BAARDA, M. J. van

1895 *Woordenlijst. Galelareesch-Hollandsch. Met ethnologische aantekeningen, op de woorden, die daartoe aanleiding gaven*, Martinus Nijhoff.

1904 *Het Loda'sch. Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie* 56: 317-496.

1908 *Leiddraad bij het bestudeeren van 't Galela'sch Dialekt, op het Eiland Halmaheira*. Martinus Nijhoff.

BAARDA, M. J. van and DIJKEN, H. van

1895 *Fabelen, verhalen en overleveringen der Galelareezen. Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie* 45: 192-290.

- BARETTA, J. M.
1917 *Halmahera en Horotai*. Mededeelingen van het Bureau voor de Bestuurszaken der Buitenbezittingen bewerkt door het Encyclopaedisch Bureau, Aflevering 13, Javasche Boekhandel en Drukkerij.
- BARNES, R. H.
1974 *A Kedang*. A Study of the Collective Thought of an Eastern Indonesian People, Oxford Monographs on Social Anthropology, Clarendon Press.
- BELO, J.
1953 *Bali: Temple Festival*. Monographs of the American Ethnological Society No. 20, J. J. Augustin (HRAF).
- BROWN, Roger W. and LENNEBERG, Eric H.
1954 A Study in Language and Cognition. *The Journal of Abnormal and Social Psychology* 49 (3): 454-462.
- CALON, L. F.
1893 Woordenlijst van het Dialect van Lio. *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 35: 200-208.
- COVARRUBIAS, M.
1938 *Island of Bali*. Alfred A. Knopf (HRAF).
- COWAN, H. K.
1957 Prospects of a "Papuan" Comparative Linguistics. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie* 111: 70-91.
1959 A large Papuan Language Phylum in West New Guinea. *Oceania* 28: 159-166.
- CUNNINGHAM, Clark E.
1964 Order in the Atoni House. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie* 120: 34-68.
- ELLEN, G. J.
1916a Woordenlijst van het Paoe op Noord-Halmahera. *ibid.* 72: 64-102.
1916b Woordenlijst van het Modole op Noord-Halmahera. *ibid.* 72: 103-139.
- FORTGENS, J.
1928 Grammatikale aantekeningen van het Tabaroesch. Tabaroesche volksverhalen en raadsels. *ibid.* 84: 300-544.
- 合田 濤
1976 「ボントック・イゴロット族の方位観覚書」『社会人類学年報』2: 79-104.
- HOOVKAAS, Jacoba
1956 The Balinese Realm of Death. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie* 112: 74-93.
- HUETING, A.
1908a *Tobeloersch-Hollandsch Woordenboek met Hollandsch-Tobeloersche inhoudsofpgave*. Martinus Nijhoff.
1908b Iets over de "Ternataansch-Halmaherasche" Taalgroep. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie* 60: 369-411.
1921 De Tobeloreezen in hun denken en doen. *ibid.* 77: 217-358.
1922 De Tobeloreezen in hun denken en doen. *ibid.* 78: 137-342.
1936 Iets over de spraakkunst van de Tobeloreesche Taal. *ibid.* 94: 294-407.
- JELLESMA, E. J.
1875 Woordenlijst van de Taal der Alifoeren op het Eiland Boeroe. *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde* 21: 295-322.
- イエンゼン, アドルフ E.
1972 「試合組, 双分組織と方位観」岡千曲訳, 大林太良編『神話・社会・世界観』角川書店, pp. 155-183.
- 倉田 勇

吉田 ハルマヘラ島における民俗方位の構造

- 1964 「バリ島民の方位観(1)」『無憂樹』5:1-3。
1965 「バリ島民の方位観(2)」『無憂樹』6:1-4。
1968 「民俗方位観を探る若干の考察」『無憂樹』9:2-7。
1972 「「民俗方位」の一考察」『天理大学学報』82:121-140。

LEIRISSA, Richard Z.

- 1975 *Maluku Dalam Perjuangan Nasional Indonesia*. Lembaga Sejarah Fakultas Sastra Universitas Indonesia.

MAAN, G.

- 1940 *Boelisch-Nederlandsche Woordenlijst met Nederlandsch-Boelisch Register*. Verhandelingen van het Koninklijk Bataviassch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen, 74 (3), A. C. Nix en Co.

馬淵東一

- 1974 「琉球世界観の再構成を目指して」『馬淵東一著作集』3:425-453。

McGEE, W. J.

- 1899 *The Beginning of Mathematics*. *American Anthropologist* 1: 646-674.

ピガフェッタ, アントニオ

- 1965 「マガリャンニス最初の世界一周航海」長南実訳, 増田義郎注『コロンブス, アメリゴ, ガマ, バルボア, マゼラン航海の記録』大航海時代叢書 I, 岩波書店, pp. 479-670。

SALZNER, Richard

- 1960 *Sprachenatlas des indopazifischen Raumens*. Otto Harrassowitz.

崎山 理

- 1974 「マライ・ポリネシア語族におけるブリ語(ハルマヘラ島)の系統」『南島語研究の諸問題』pp. 196-222。

STURTEVANT, William C.

- 1964 *Studies in Ethnoscience; Transcultural Studies in Cognition*. *American Anthropologist* 66 (3) Part 2: 99-131.

SWELLINGREBEL, J. L.

- 1960 *Introduction in Bali*. In W. F. Wertherin (ed.), *Studies in Life, Thought and Ritual*, W. van Voeve, pp. 1-76 (HRAF).

TREGGAR, Edward

- 1969 *The Maori-Polynesian Comparative Dictionary*. Oosterhout N. B.

移川子之蔵

- 1940 「方位名称と民族移動並に地形」『安藤教授還暦祝賀記念論文集』三省堂, pp. 127-154。

VAN DER KROEF, Justus M.

- 1954 *Dualism and Symbolic Antithesis in Indonesian Society*. *American Anthropologist* 56: 847-862.

WATUSEKE, F. S.

- 1976 *West Makian, a Language of the North-Halmahera Group of the West-Irian Phylum*. *Anthropological Linguistics* 18 (6): 274-285.

吉田禎吾

- 1975a 「バリ村落の宗教と世界観」『アジア経済』16(10):23-37。
1975b 「バリ島における呪術と象徴的世界」『社会人類学年報』1:133-147。